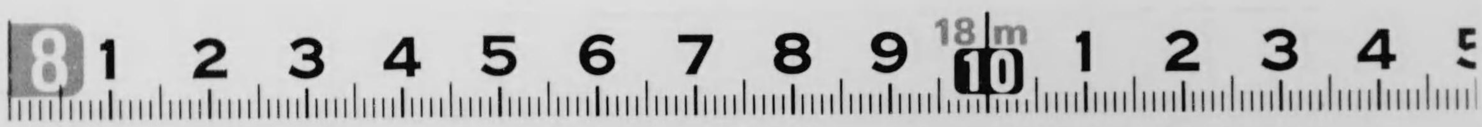
364
314



26. 7. 21

コ-71
元
364-314

やなぎ檜評釋

文學士 沼波瓊音 著

東京
南人社藏版

大正
6. 10. 26
内交

自序

私が川柳を始めて讀んだのは何歳頃であつたか、それは名古屋に居た頃で、例の貸本屋「大惣」から柳樽を借りて來て讀んだのである。今の少年と違つて、まだ私の時代には、あの柳樽の原書を十だいで讀む事も、たやすいやうに教育されて居た。わからぬ句が多くて口惜しかつたが、わかるのは素敵に面白いと思つた。その頃博文館から出て居た「日本之少年」に何とか云ふ人が、川柳の評釋を連載して居たのも、甚だ愛讀して居た。その後東京に遊學するやうになつてから、東京では讀み得なかつたが、暑中休暇で歸省して居る間に、時々又大惣から柳樽を借出しては讀んだ。面白いと思つたのを書抜きもした。學校生活が終つて、東京で家庭を持つてから、今

度は帝國圖書館から柳樽を借出して、圖書館にあるだけのを讀んだ斯うしてともかく柳樽に目を通した事は四五度はあらう。併しもとより玩讀で、わからぬのを調べると云ふ心は起さなかつた。三敎書院で袖珍文庫を發行した時に、柳樽を是非入れようと主張して、該文庫の二三冊分飜刻した。そのうちに、熱心に柳樽其他の柳書を研究する人がなか〳〵澤山出來て、專門の雜誌も出來、この句などは今日どうしても解るまいと思つたのが、その人等の勞によつて、段々とわかつて來たのを見て、私は驚き且つ敬服した。實際俳諧の方に斯う云ふ風に、忠實に故人の句を調べる人が、も少しあるなら、どの位俳諧が明るくなつてるだらうと、今も羨しく思ふ。俳諧の方では、古句を、調べると云ふ事をしないで、たゞ勝手に思つた儘を

吐散らしたものが、何々講義などゝ云ふ本になつて、それが又流布して居る。今日に於て、溫故と云ふ事は、俳壇は遙に柳壇に劣つて居る。私はこれ等尊敬すべき柳壇の研究者に敎はつて、この書を書き得たのである。

私が柳樽評釋を書くと云ふ事は、唐突な事に思ふ人があるかも知らぬ。併し私自身では、幼い時から好きであつた川柳に就いての書を出すと云ふ事は、唐突でも何でも無い。

私は去年から今年へかけて滿一年餘り、世人の所謂世外の人になつて居た。この長い間殆ど讀書をした事無く、殆ど日記以外に筆を執つた事が無かつた。それが、今年の四月を轉換期として、再び著述業者に戻るべき運命になつた。そして其頃から私の友人なる川口

君が南人社を經營し始めた。私は同君の爲に何か本を書かうと思ひ君は私に柳樽評釋を書いて呉れと云つた。成程拔萃して釋したものはあり、專門の雜誌に、一部分續けて釋されたものはあるが、柳樽を片ッ端から評釋した單行本がまだ無い。まことに有るべきものでまだ無いのである。もと〳〵好きなものだから、よし來たで引受けたが、私が江戸時代の知識に甚乏しいのに今更自ら驚いたのであるそれで一旦は、私よりも、多年專門に研究してる人があるのだからと云つて、一二の人を指定して、この人等に賴む方が當然であると云つて、辭した。川口君はどうしてもこれを許さなかつた。それでは、これを機として、江戸時代の一部の知識を得て置かうと云ふ氣になつて、川柳專門の雜誌や、川柳に緣のある書物などを、大急ぎ

で目を通し、評釋に必要な知識を得る毎に、カードに書取つて、假名分けにし、それを間に合はせの川柳辭書として、評釋に着手したのである。さうしてこの準備に川柳書類を調べ始めたのが六月十八日で、評釋を書始めたのが、その三十日である。川柳辭書を一方に作りつゝ、一方にその辭書を引きつゝ書くのであつた。今までこの方面を調べると云ふ事を少しも爲なかつた男が、十分調べ拔いた人の爲すべき仕事をするのであるから、大變な輕業であつた。そしてともかくこれだけのものを書き得たのは、全く專門研究家のお蔭である。實は私が斯う云ふものを書いては、專門の方に嘸なまいきな野郎として叱られることゝ思つて居たところ、私が斯う云ふ仕事を始めたと聞いて、專門の方から、非常に喜んで下すつた手紙をいろ

いろ頂き、中には、禮狀めいた文言さへあつたのは、甚だ恐縮すると共に、その方々の寛洪にして、斯道を愛するの切なる事が現はれて、奥床しく嬉しく思つた所である。

大正六年九月十日夜

しげき虫のねを聞きつゝ

瓊音誌

凡例

一　本書は全く川柳の味を知らざる人に始めて川柳を説く態度にて書きたり。

二　柳樽原書にある序文其他、川柳にあらざるものは、總て省き、川柳のみを評釋する方針なり。

三　本書は柳樽初篇の部をも終らずして、豫定の頁數に充ちたり。されどこれより簡單なる釋をなしては第一の目的に背き、これより厚き書を刊行するも不便なれば、先づこれだけを一册とし、逐次この續きを書く積りなり。

四　柳樽は、書によりていろ〳〵に綴りあり、故に定まりたる順序あらず。もとより順序に意味あるにあらねば、本書の句の順序

も、余の執筆の都合上出來たるものなり。但し索引を附し置きたれば、それにて此書中の句は檢索するを得。

五　猥褻と認めらるゝ句は一切省きたり。

六　柳樽初版にありし句の、重版の折他の句と變り居るものは、兩版の句を共に出だし置きたり。

七　遂に解くを得ざりし句は卷末に列べて、識者の示教を仰ぐ事としたるが、評釋したる句に就ても、誤解と思ひ給ふものあらば一々叱正を賜はらむことを、謹みて江湖諸賢に乞ひ置く。

八　今井邦木氏、其他諸氏の著書の爲に教へらるゝ所甚だ多かりしを感謝す。又、幸田露伴、阪井久良岐、梅本高節等諸賢より特に示教を賜はりしは著者の深く感謝する所なり。

やなぎ樽評釋

沼波瓊音著

初篇の部（明和二年の序あり）

五番目は同じ作でも江戸うまれ

「成程上の註で、五番目は同じ作でも、までは解つたが、江戸うまれが解らぬ。六阿彌陀の成立ちを聞かせて貰ひたい。」「天平十三年、行基菩薩四十三歳の御時、東國へ教化に赴かむとて、先づ紀州の熊野權現へ參籠せられた。其の歸り途に、杉の大木があつたので、これで佛像を造らうと思立たれ、其の木を伐らせ、そして佛に、此事が

「五番目」六阿彌陀の五番目、今下谷區上野廣小路町二五天台宗寛王山常樂院長福壽寺の阿彌陀なり。

六阿彌陀は皆行基の作と傳ふ。

江戸時代より今に至るまで彼岸に六阿彌陀詣とて、六所を巡拜する習はしあり。六阿彌陀とは、

一番、武藏國足立郡本木の三緣山長福寺
二番、同同下沼の甘露山延命院應味寺
三番、同豐島郡西ヶ原の佛寶山西光院長福寺
四番、同同田端の寶珠山地藏院興樂寺
五番、前記
六番、同葛飾郡龜戸の西歸山無量壽院常光寺

佛意に協ひまするならば、此木を私よりさきに有緣の地に至らしめ給へ、と申されて、そこの谷川へ流され、それより自分は東國に赴き、今の傳通院の西なる光圓寺のある場所へ來られると、かの木はこゝの入江に漂着して居た。この頃はこの邊から高田の邊り神田橋の内外迄すべて海水の入る江川になつて居た。行基大いに歡ばれ、東方に向ひ、慈母藥師女に香華を捧げて禮拜せられる。と藥師女金色の光を放つて現はれ給ふ。行基即ちこの木の幹の太い部分でこの藥師女の尊像を摸し刻み、それを本尊としてこの地に寺を營まれた。それが光圓寺に安置してある所謂本木藥師如來である。いま光圓寺の本尊は惠心僧都作阿彌陀如來で、藥師如來は別に安置してある。

行基は更に六道流轉の衆生を救はむ爲に、幹の先の方で、六體の阿彌陀を刻み、これを六ヶ所に分たれた。それが即ち江戸の市中郊外にある六阿彌陀である。」「それぢや皆同じ所で御誕生で、五番目だけを江戸生れと云ふのは變ぢや無いか。」「君のいふ所は尤だ。それアどうしても、生れ、と云へば行基の手に作り出された時を、生れた時とせねばならぬ。安置された時を生れたとは無理といはねばならぬ。併し、この作者は、そんな由來の穿鑿はせず、たゞ六阿彌陀は皆行基の作、と云ふ事と、外の五阿彌陀は市外に在つて、五番目だけが市中に在ると云ふだけの知識で、五番目だけが江戸ッ子だと云ふ輕い意味で、江戸生れ、と云つたのであらう。」「江戸育ち、とすれば

難は無いな。」「その江戸育ち、と云ふ程の意味なんだらうよ。」「それから、も一つ聞くが、或本を見たら、常樂院は明治四十年十二月廿七日の日附で、常樂院が東京諸新聞に墓地全部を巣鴨村字庚申塚四五〇に移すと云ふ廣告を出した。これ以來六阿彌陀は悉く郊外のものになつて了つたとあるが、果して上の註のやうに、今でも廣小路に常樂院があるかね。」「あるとも。移轉は墓地だけで、庚申塚の正法院の地内に移つたので、寺はチャンともとの所にあり、阿彌陀樣もチャンと在る。直ぐわかる。廣小路の三橋のそばだ。眞向ひに鈴木時計舗の大時計、北隣に不動貯金銀行上野支店の一寸風變りな洋館を控へて、黑ずんだ古い門が立つてる。それが常樂院である。境内

「かみなりをまねて」
このまねる人は母か乳母か子守か等なり。但し必ず女性なり。

は今狹いが、いかにも別天地である。門の横に六阿彌陀五番目の標石が立つて居て、その前が人力車の溜り場になつて居る。それから、これは元は誤植で、それが傳はつたのであらうが、この常樂院の山號が、よく寶玉山と記してあるが、これは寶王山の方が正しいから、この事も序に注意して置く。

かみなりをまねて腹掛やつとさせ

子供が丸裸で遊んでゐる。腹掛をさせぬと、腹が冷えるからと、腹掛を持出すと、子供は裸好きのもの、イヤ〳〵と逃出す。乳母暫く追ひかけたが、やがてトンと坐り、驚いたやうな顔して「オヤ、ゴロ〳〵ゴロ〳〵、

「上るたび」この女房もと屋敷勤めして居たものにて、盆暮等に御機嫌伺ひに御屋敷へ上るなり。
「いつかど」しつかりと、と云ふこと。川柳によく出る語なり。
「しめて」せしめる、と云ふこと。貰ひ物して來るを云ふ。

オヤ雷様が鳴つてます。おゝ怖い、腹掛しないと、お臍を取られますよ。」
子供びつくり乳母に寄縋る。そこで、やつと腹掛をさせる。

上るたびいつかどしめて來る女房

今ならば、伯爵家にもと小間使して居た女房である。
「只今歸りました。」「大變ゆつくりだつたね。なんだ、その大きな風呂敷包は。」「今日は奥様が、ひまだから話して行け〳〵と仰しやいましてね。そのうち御前様も若様もお歸りになるし、久しぶりに賑やかに御話をして來ました。今度出來た離れはそれは結構で厶いますよ。まアお待ちなさい。今わたしが出しますよ。まづ越後上布が一反。これは奥様が飽きたからツてわたしに下すつたの、ゴブランですツて。それからこれが熊本の朝鮮飴。それから、」

「ひよ〳〵」まだ出來

古郷へ廻る六部は氣の弱り

なんだか心細くなつて、急に郷里戀しくなり、まだ豫定の巡拜は仕舞へぬが、この追分から、連に別れて郷里を指す。自分で鳴らす鉦もいつもより哀れに、空うす暗く、烏默つて飛ぶ。自宅の樣子がありゝと頭に浮ぶ。

ひよ〳〵のうちは亭主にねだりよい

たての、小さく輕々しき樣に云ふ。こゝにては新所帶のこと。

「羽白」鴨の一種。赤羽白、星羽白、金黑羽白、鳴羽白あり。赤羽白は次列風切白く星羽白は腋下白く、金黑羽白は腹、腋下、次列風切白く、又背又は

まだ所帶の持ちたてゞ、ひよ〳〵してゐるうちは、あれを買つて下さい、これを買つて下さい、と亭主にねだりよいと云ふのである。商が手廣くなり、家族が多くなれば、半襟一つもなか〳〵むつかしくなつて來る。

花嫁のうちは恥かしくて、ねだりにくいものであるから、子供の着物と解いた方が可いと云ふ說もあるけれども、子供のことにすると、「亭主に」と云ふ語勢が利かぬ。

伴頭は內の羽白をしめたがり

この伴頭、單なる戀ならで、慾が伴なつてるが憎し。すでに伴頭なり。久松の若さにはあらじ。

羽白に就て頭註に記したのは、今の學術上の解說で

肩に白き彎曲斑あり、鳴羽白は腹腋下白く、頭項多くは白く、背と肩とに白き彎曲斑あり。こゝにては娘のことに云へり。齒白に通はして云ふとの說あれど、然か云はずとも、食用として普通なる鴨のうちの羽根白き可憐なるを娘にいひたるなり。

「しめたがり」鴨としては、食ふ爲に締め殺すこと。娘としては抱きしめること。抱きしめることを單に、しめる、と云ふこと唄にもよくあり。

「鍋いかけ」鍋かけ屋。

あるが、古く「季寄和田津海」に、羽白、是又鴨の一種なり。全體黑く兩脚白く、頭上に黑長毛有て、冠の如し。といへり。」とある。この記述は名稱にそぐはず、誤であらうと思はれる。

鍋いかけすてつぺんから煙草にし

「すてつぺんから」あたまから。初めから。

「ごぜ」盲の女にて多く琴三味線の師をなす「盲に」盲にして。

「鑄かけ屋でムい。鍋釜鑄かけエ。」と呼んで今も來る鑄掛屋である。彼は小さな鞴を持つてゐる。呼ばれて鑄かけを頼まれると、門前で店を開く。先づ鞴で火を起す。起つた火で一服やる。それから仕事に取りかゝる。外の職人なら、仕事をやつて、中休みの時に煙草をのむのであるが、いかけ屋は抑の眞先きに煙草をやらかす。この觀察のをかしみ。

人をみな盲に瞽女の行水し

自分が見えぬから、見られると云ふことに無頓着で、そこらに人が居ても、平氣で、すべてを露はにして行水してる樣である。その樣が、人を皆盲でゞもあるやうに

「所かきけば」誰かの住所を尋ねるを云ふ。

してゐると、多少馬鹿にされたやうな侮辱を、見る人が感ずる、そこを云つたのである。

米つきに所を聞けば汗をふき

米をついてる所へ通りかゝつて、一寸尋ねたいが、なんでも、この手取橋の近くだと聞いたが、木藥屋の太兵衛さんてのは、どちらでせう、と聞く。米つきは、搗くのを一寸止めて、先づ何にも云はず汗をふき、暫くあつて、ア、太兵衛さんとこかね、と敎へて呉れる。この米つきが、聞かれて、答へるまでの無言の汗ふき、こゝを拂へたのである。米つきそのものが躍如としてゐる。運動してる時より運動を止めた刹那に、ドッと大汗が出る

「拜まれた」すつぽんを料る時、すつぽんの悶く時拜むやうなる形するものなり。

「齋日」正月十六日、七月十六日の戒入。

もの。

すつぽんに拜まれた夜のあたゝかさ

すつぽんは血を增すものとして、藥食にも食べられた。この句はすつぽんを料理して食べたその夜ホカ〳〵と體が暖い、との意であらう。

齋日の連れは大かた湯屋で出來

明日はどこへ行かうかと、嬉しい豫定を作りつゝ、齋日の前夜先づ湯屋へ行くと、向ひの富公も來てゐる。お君は明日どちらへ行く積りだ。僕か、何しろ我店ぢや大した小遣も呉れないから、活動でも普通席で謹んで觀

「入髮」髮の毛の足らぬのに髮を添へて結ぶこと。

「いけしやあ〳〵」平然。

「中の町」吉原のまん中の通り、仲の町。

て、腹をへらして歸る位のことだらうさ。不景氣なことを云ふなイ、僕が面白い所へ連れてつて遣らう。目と目の距離の馬鹿に遠い松之助や、チャップリンの肩のすぼめ工合なんか、もう大抵見飽きたらうぢや無いか。大丈夫僕におんぶし給へ。おいこのシャボンは堅くて宜いよ。かまはず使ひ給へ。

入髮でいけしやあ〳〵と中の町

吉原で、客が馴染の家へ來ず他の家へ遊びに行くことがわかると、さきの馴染の妓から、今度客が來た時知らせてくれと賴みやる。それをさきで知らせぬ時は新造、禿などを指揮して大門口に待伏させ、その客の歸り來る

姿を見つけるや、「吉原青樓年中行事」に所謂「誰そや行燈をひつくりかへし、井戸ばたにすべりこけて、軒下の犬を驚かし、おくり物をさげ行く茶屋の男に鉢を割らせ、うろたへても肥取のてんぴん棒に行きあたらず、逃出す羽折は斜にひらつき、追懸る振袖は朝風にひるがへり」、と大變な騒ぎで、客を捕へ、剛染の家に連れ行き、樣々の侮辱にあはせ、わびとして大散財をさせる。甚しい時には客の髻を切つて了ふことまである。この句はこの大制裁にあつた客が、その後入髪をして平氣な面して中の町を通るを寫した。

百兩をほどけば人をしさらせる

「針とがめ」針で突いた傷が、こじれて、痛みを增し熱を發するを云ふ。

百兩包んであるのをほどくと、そこに居る人が、無意識に體を退ける。その光景を叙したのである。大金ゆゑ、小判がどこかへ轉がつても、疑ひがかゝらず、直ぐに目付かるやうとの用意が、無意識に働く。と云ふ解があつたが、心理的に云へば、先づそんなものであらう。

じれつたく師走を遊ぶ針とがめ

一寸針で突いたのが、とがめて、なかなか直らぬ。丁度十二月で、針仕事の忙がしい折柄になつて、よんどころなく遊んでゐる。そのじれつたさ。

この句の命は、實に「じれつたく」にある。

「九郎介」九郎助稲荷のこと。
「代句だらけの」吉原の遊女がそれ〳〵人に代作をして貰つた句を書き連れたる。
「繪馬」狹き意味の繪馬にあらず、こゝにては、額を云ふ。發句を書き連れたる額なり。

九郎介へ代句だらけの繪馬を上げ

「仲人は、眞崎、眞黑な、くろ助稲荷につまゝれて」と紀伊國で唄ふあの九郎助稲荷である。字は九郎助とも九郎介とも書く。

今の吉原は稱の如く新吉原で、もとは今の日本橋區富澤町長谷川町の南隣、曲突河岸の邊にあつた。元和四年十一月にこゝに吉原廓建揃つて營業を始め、明暦三年六月に今の地に移轉した。それで舊地時代の吉原のことを元吉原と云ふ。九郎助稲荷はこの元吉原の地に、和銅四年來鎭座された。俗傳によれば、其昔白黑二疋の狐が現はれたので、白狐の方は今の日本橋區本銀町一丁目十八番地の白旗稲荷に祀られ、黑狐の方は、千葉九郎助と

云ふ者の地内の田畔に勸請せられ、田畔稲荷と云はれて居た。さて元吉原設置になると、この田畔稲荷はその地の鎭守と仰がれ、緣結びの神と呼ばれ、この頃はすでに千葉氏の跡が絕えて居たから、九郎助が稲荷と稱したと云ふ事になつてゐるが、白黑兩狐と云ふのは、源義家奥州下向の途次社頭に白旗を樹てたと云ふ傳へのある白旗稲荷の稱の白と、一方九郎助稲荷にクロの音あるとから、後に揑造した緣起であらう。田畔稲荷と云ふ稱は、その時代にありさうな稱で、或はこれを略して畔稲荷といひ、よく助とか兵衞とか左衞門とかをいろ〳〵な稱に附けるやうに、この畔にも助の字を附けて洒落て呼んだのが、遡つて九郎助と云ふ人があつたと云ふことになつ

たのではあるまいか。千葉氏と云ふのゝ地内の田の畔に祀つてあつた古い稲荷様と云ふことだけが確らしい。ところが又、一説には、新吉原の地に鎭守の神が無かつたので、今戸村の百姓九郎吉の倅九郎助の畑道にあつた稲荷を勸請したのだとも云ふが、これは疑はしいやうに思ふ。

さてこの九郎助稲荷は、吉原移轉と共に、社を、新吉原の京町二丁目に移し、享保十九年に正一位大明神の官位宣下があつて、その八月朔日に大祭を執行した。その時の餘興にやつたのが、今も催す吉原の仁和賀の起りである。

遊女が守護を祈り、かねては各〳〵の名の廣告をする爲

に、その道の人に發句を代作して貰つて、麗々と大額をしつらへ、初午にでも献納したのを、見て、ヤ、列べた列べた、右近、皐月、綾衣……、これで見ると皆いつぱしの俳諧師だからをかしい。」と嘲つたのがこの句である。

しつッこく九郎助稲荷に執着するやうであるが、今日はこの社がどうなつたかと云ふと、衣紋坂下右手にもと吉徳稲荷と云ふがあつたが、明治五年に、こゝへ江戸町一丁目の榎本稲荷、同町二丁目の明石稲荷、京町一丁目の開運稲荷、と及びこの同町二丁目の九郎助稲荷を合祀して、吉原神社と號した。この神社は明治廿九年八月中に社殿華表等新建されたが、明治四十四年の吉原の大火

に燒失して、今日は假拜殿が設けられて居る。

使者は先づ馬から下りて鼻をかみ

使者とあるからは、改まつた上命を受けての使で、上下を着て馬に乘つて來たのである。その使者が、使ひ先へ着した所の光景である。使者は、愈これから上を耻かしめぬ口上を述べねばならぬので、馬を下りると、第一に鼻をかむのである。

この句は想像で無く、實際、使者に立つ人は、誰も、申合はせたやうに斯うしたのを、この作者が捕へたのであらう。

「梅若」今、東京府南葛飾郡隅田村なる天台宗、梅柳山隅田院木母寺に梅若丸の塚あり。三月十五日梅若の忌日にて、大念佛を修す。參詣者多し。

「地代」緣日商人の露店や茶屋の繩張の地代

「宵に定まらず」普通緣日の前日の宵までには地代定まるなれど、この梅若は少し夜に入つても無くては定まらぬとなり。この頃空よく曇り雨を催すこと多く、梅若の日にもよく降ることありて、これを梅若の涙雨と云ふ程なり。故に空を懸念

梅若の地代は宵に定まらず

この句に就いて別に云ふことも無いから、梅若丸の傳を云つて置かう。この後梅若に關した句が時々出て來るから、その必要がある。梅若の事は諺や小說などにいろいろ作られてあるが、その確乎とした傳はわからぬ。併しいろ〳〵の傳說のうち眞に近いのは次のである。梅若丸は貞元の頃のもので、京都北白川吉田少將の子、五歲で父におくれ、七歲の時から比叡山に登り、月林寺に入つて習學した。其頃同山東門院に松若丸と云ふ兒があつて、日頃才學を爭つたが、どうしても梅若丸に及ばぬ。東門院の僧たちこれを口惜しがり、その事から兩寺の爭鬪に及んだ。梅若丸憂き事に思ひ、潛に身を遁れて、家

して宵に定まらぬなり

に歸らむとし、大津まで來た。時は二月二十日過ぎの夜であつた。こゝへ奥州の信夫藤太と云ふ人商人が來蒐つて、梅若をすかして東國へ連れて行つた。梅若は心身非常に疲れて、途中から病にかゝつて、武藏國隅田川の岸で十五歳を一期として歿した。それは三月十五日の事である。藤太はその病篤きを見て打棄てゝ去り、あとは所の者が介抱した。「たづね來て問はゞ答へよ都鳥すみだ川原の露と消えぬと」これが彼の辭世であつた。この時出羽羽黑山の下總坊忠圓阿闍梨がこゝに來あはせて、土地の者と共に、梅若の骸を葬り塚にし、上に柳を植ゑて印とした。後、梅若の母花子こゝに尋ね來り、この地に草堂を營み、忠圓阿闍梨をこゝに居らしめて、常行念佛の

「投入」挿花の一法。一枝二枝無造作に挿したるを云ふ。

「間の宿」旅人の多く

道場とし、花子自らは、薙髪して妙龜尼と名乘り、淺茅ケ原即ち今の淺草寺境内の邊に庵を結んで終つた。

世にもあはれな出來事であればこそ、いろ〳〵の小說も出來、また忌日に念佛をも修して來たので、涙雨と云ふ名も、まことに天も哭し給ふが自然と思つた故に出來たのであるが、人は長く一つの事に同じ感情を以ては居ぬ。「地代は宵に定まらず」と、却て涙雨がをかしみを產んで來た。又息子連はこの梅若忌を吉原へ行くよい口實にもした。

投入の干からびて居る間の宿

今でも徒步旅行して、小さい村を通ると、斯うした光

休み宿る驛で無く、さう云ふ驛と驛との間の小驛にて、旅人が立寄りても一寸小休みする位の所なり。

景がある。ひしやけたやうな家が並んでゐる。此の家のかげに六部がしやがんで休んでゐる。飲食店などあることはあるか、その軒先きに紙を切り裂いたものがビラビラさせてある。それは、うどんの看板である。奥の座敷が外からも見える。そこの床柱に竹の花筒がかゝつて、それに野菊が投入れてあるが、いつ活けたのやら、バサバサに干からびて、花瓣が粉薬のやうにそこらに散らばつてゐる。

かる石も一つ交つて義を立てる

大石良雄、大石良金など、いづれも義に堅き面々と共に、お輕も義を立てた。と云ふのを、輕石と洒落れたのである。甚だくだらぬ洒落で、しかもこの洒落が中心になつてゐる。つまらぬ。

大星と云ならしてゐる芝居の方を離れて、大石と云ふを含んで、輕石と云つたのであるから、實際あの女が、芝居で云ふやうにお輕と云ふ名で無くては、虚實混じて變であると云ふ人があつたが、あの女は實際お輕と云つたのである。京は一條通寺町の邊に住んだ二文字屋次郎左衛門の女で、小山源五左衛門進藤源四郎の肝煎で良雄の側室にされた美人であつた。

法眼のすゝめで四本木を植ゑる

息子がどうも加減が悪い。醫者に見せると、これは晴

「法眼」僧位の一。鎌倉時代より江戸時代にかけて、法橋、法眼、

法印を佛工、醫師、連歌師、繪師に授くる風を生じたり。こゝの法眼は醫師なるべし。

「四本木を植ゑる」蹴鞠の設備をすること。蹴鞠の場所には、四方に木を植う。これを懸りと云ふ。東北に櫻、東南に柳、西南に楓、西北に松を植うるを普通とす。

「祐經」工藤祐經。建久四年曾我兄弟の爲に父の仇として討たる。

「岡場所」官許の遊廓（即ち吉原）以外の賣色の居る所を云ふ。深川、蒟蒻島、芝神明、根津、谷中、音羽など三十餘ヶ所ありたり。

れ〳〵した所で、運動させたが宜い、とのことで、親は子の可愛さに、鞠場の懸りを植ゑさせる等その支度に取りかゝる。

蹴鞠は堂上方の遊びではあるが、この時代（明和）頃には、盛に平民間に流行した。「山寺の和尚さんが鞠は蹴りたし鞠は無し、かん袋へ猫をどし込んで云々」の唄が今も殘つて居り、又「そろ〳〵と息子碁に飽き鞠に飽き」などゝ云ふ川柳もある。

祐經は椿の花の盛りなり

祐經、賴朝に事へて大いに用ひられたが、間も無くコロリと首が落ちた。丁度椿の花が盛りになると、直きに落ちるに似て居た。

祐經は伊豆の人で、伊豆は椿の名所であるので、それを含んで斯う云つたらうとの說もある。

岡場所で禿といへば逃げて行

吉原の麟々堂々たると違つて、岡場所は、深川の如きを除いてはすべて蠻味がある。そこを川柳子はよく寫してゐる。吉原の禿にあたるのは、「こぢよく」である。「下女でなし禿でもなしこぢよくなり」と云ふ句でもわかるやうに、禿見た目には、子守とでも紛ひさうに見える。それに對して「禿」と呼びかけると、冷やかされを恐れて逃げて行く「こぢよく」の風情。

「雀形」雀の翅を張りたる樣を圓く描きたる模樣を云ふ。この頃吉原にて屏風の裏に大抵この模樣を附けたりと見ゆ。

雀形をたゝくとは屏風をむかうから叩くを云ふ。

「日本勢」文祿の役の折の日本軍。

「伽羅」香木。交趾の

雀形たゝいて雪の注進し

吉原の冬の朝の一景である。客はなほ擁して濕き衾に在る。外は雪が降つて來たので、禿か何かゞ、「もしえ、雪が降つて來ました」と知らせてるところである。「屏風をたゝいて」と云つたら、一向味が無い。「雀形」と云つたので、目に見えるやうに感ずる。雪になれば懐の暖いのはまづは居續けにする。そして又初雪には、雪見とて、特別に散財をするが、習慣になつてる。懐の淋しい客は、雪の注進をされるとヒヤリとするのである。

日本勢一人は伽羅の目きゝもし

小西行長はもと藥屋である。だから伽羅の事にも通じ

を上品とし、邏羅のを中品とし、占城のを下品とす、と云へば、朝鮮支那あたりにては、多く伽羅に出あふ筈なり。

「かの」僧のゝころものこと。

て居たらう。朝鮮あたりで、伽羅に出あつても、行長が居るから、それの目利が出來たらう。チャンと自然に伽羅の自利が一人附いてる、と笑つたのである。

清正が行長の素性を蔑んで、そこもとは何を旗印になさる、と云つたら、大きな紙囊を竿にたてます、と威張つた、と云ふ話がある。

脇差をもどせば茶屋はかのを出し

僧が遊所へ行くことは御法度であつたが、ひそかに行く者は、茶屋で脇差を借り小袖黑羽織を着て醫者に化けて大門をくゞつたものである。この句はその化醫者が歡樂を濟ましての歸りで、またもとの僧形に戻るところで

「大つゞみ」能の大つゞみ。こゝに云ふは薪能の光景なり。
薪能とは奈良興福寺の南大門にて二月七日より十四日まで行ふ能にて、時は夜、場所は屋外にて、薪を焚き上げその光りにて演ずるなり。
「茶食」古書に飯の字をよく食と書けり。覺えおくべし。茶めしとは、こゝにては奈良茶飯の略。大豆小豆栗などを加へたる茶飯なり奈良の東大寺興福寺等にて炊き初めたりと云ひ傳ふ。
「佛」お人よし。
「猿田彦」祭禮の行列のまつ先に猿田彦に扮したる者行く例なり。こゝに云ふは江戸の山王祭か神田祭なるべし

ある。かのと云ふのは、「彼の」で「かのもの」と隱して云ふ語を略したものであらう。

大つゞみ茶食の胴をぶつ潰し

能を見た人は、大つゞみ打つ人が勢一杯の打ち力をするものであることを、知つて居よう。
奈良は茶飯の本場、あの大つゞみの先生も茶飯をたらふく食つて來たのであらうが、かうして見てゐると、茶めし腹を潰して了ひさうな打ち力をしてゐる。腹と云は胴と云つたのが、非人情味が出て居て面白くなつてる。

「道ろく神」道祖神の

町内の佛捕へて猿田彦

猿田彦の役は赤い鼻高の面をかむり、水干を着け、榊を杖にして、歩々威張つて、列の先頭をするのである。第一暑い折柄に面がたまらず、顔が出せぬので、娘たちに見知られず、擧動がいなせで無い等の理由で、若い者等はこの役を厭がる。それで町内でのお人よしをつかまへて、拜みたふして猿田彦にするところである。

つまむ程道陸神に箔を置き

辻に立てゝある道陸神を見ると、少うし箔がしてある。そのほんの申訣のやうに少量な所を寫したのである。

おはぐろをつけ〳〵禿にらみつけ

遊女がお齒黑をつけてる。物が云へぬ。禿が何か氣のきかぬ事をした。口で叱ることが出來ぬので、目でにらみつけた所。お齒黑をつけてる形相口のあたり一寸凄味のあるもの。それが怒を含んでにらみつけた樣、見えるやうである。この句は遣手とも見られる。

四郎兵衛もひやうひやく交り暇乞

年が明いたか、受出されたか、ともかく吉原の遊女が、

「おはぐろ」昔は遊女お齒黑をつけたり。

「四郎兵衛」元吉原の時代には庄司甚右衛門廓内の事務を執りしが訛。

苦界を出るところで、番人の四郎兵衛に、「久しう御世話になりました」などゝ暇乞を云ふ。四郎兵衛も、冗談交りに別れを告げる。しどけない所の少し改まつたやうな趣。

佐渡の山檢使の前でぶらつかせ

佐渡の金山で、抗夫が山を出る時、ひそかに金を盜み

新吉原に移轉後は三浦屋四郎左衛門總名主の任にあたり始めて事務所を大門内に設けて會所と號す。こゝに名主自らは居らず、三浦屋の雇人四郎兵衛なる者定詰として居たり。それより四郎兵衛の名此番所世襲の名となる。すなはち四郎兵衛と云へば吉原の番人のことなり。

「ひやうひやく」冗談口。

去るを防ぐ爲に、檢使の前で、素裸にする光景。

紙花もしばしの内の金まはし

紙花は、ぢきに現金にしてやらねばならぬものだが、それでも一寸の間の融通になる、そこの所がをかしなものである。文政時代の川柳に「紙花でやればそれ程惜しうなし」と云ふのがある。

「紙花」祝儀即ち花を出すに現金を直ぐ出さず紙を與へおき、あとにて勘定の時金にしてやる。このはじめ紙で代用するを紙花と云ふ座敷にて風致をそこなはぬ爲又こまかい錢がいくらもいる手數を省く爲に起りしなるべし

上下で歸る大工は取り卷かれ

大工が上下を着るのは上棟式に列する時である。上下で歸る大工は即ち上棟式から歸る大工である。内へ歸つて來ると、子供等が、大工の貰つて來た餅や何かを貰は

うと取り卷く所。

前垂で手をふく下女の取廻し

「まア〳〵よくいらつしやいました。おあつうムいましたでせう。それは〳〵若樣がお待ちかねで」などゝ、小氣味のよい敏活な下女、濡手を前垂でふき〳〵應接する等の樣。必ずしも應接の時のみでは無い。

「前垂で手をふく」と云一擧動で、總てを代表せしめて、活寫し畢せて居る。

「取廻し」物事を取扱ふ敏活なる態度を云ふ。

跡乘の馬は尾ばかり振つて居る

行列のどん尻に、絶えず手綱を締められて、又しばし

「跡乘」大名行列又は祭列の最後の押への騎馬從者。

「女形」女形の役者。

ば行列の整ふを待つ爲に立ちどまり勝に行く押への供は、はえぬものである。その馬がむやみに尾を振つてゐるのが、所在ないやうにも見え、おれも居るぞと人の注意を引かうとするやうにも見え、思ふやうに進まうとして進み得ぬ苛ちとも見える。

私は大名行列は知らぬが、祭禮の行列で、跡乘の馬が、一二歩進んでは締められて立ちどまり、時には苛つて體を横にし等して、よんどころないやうに尾を盛んに振る樣をよく見た。それでこの句のねらひ所、面白みがわかる。

疝氣をも風にして置く女形

「ぬり桶」塗桶なり。漆塗の次の如き形したるものにて、上に生綿をのせて引きのばす具なり。

昔、女形の役者は、舞臺外でも女裝して、平素の動作も女らしくして居たものである。その女形が疝氣を病んだ。だが疝氣では女形のぶちこはしであるから、「顏色が惡い。どうかしましたか。」「エヽ一寸風邪ひいて」とごまかしてる所。

ぬり桶はいッち化けよい姿なり

塗桶は上圖のやうに下に、笑つた口のやうな穴がある。それで目も鼻も無い、たゞ口ばかりの化物のやうに一寸見える。その感じから出來た句で、狸かなんかゞ何かに化けるとして、化けるにむづかしいのもいろ〳〵あらうが、一等たやすいのは、この簡單な塗桶に化けることであら

「寒念佛」寒三十日の間鉦をたゝき念佛を唱へて歩く修行。

う。とのこと。今の人には氣のつきさうも無い方面の着想である。

寒念佛みり〳〵〳〵と歩くなり

「みり〳〵〳〵」が面白い。うす氷を踏む音である。其季の暗夜の樣あり〳〵と寫されてゐる。「ゆらり〳〵と歩く」とか何とか云ふ云ひ方のよくあるのを使つて、「みり〳〵〳〵と歩く」と云つた所に柳味がある。

衣類までまめで居るかと母の文

娘が緣附いたさきへ母が手紙を出した。その手紙を見ると、お前も主人等もまめかと尋ねてある。そして、お

「懸り人」食客。

前の持參した衣類も、質に入れなどせず、その後チヤンとうちに在るかと、暮らし向の見舞も云つてある。ありさうな母の文である。その内容を川柳子が飜譯したのである。この句のおもてに現はれてゐる通りの云ひ方が母の文にある訣では無い。

向うから硯をつかふ懸り人

硯がこつち向きに置いてある。それを向うから使ふのだから、硯を逆樣に使ふのである。懸り人の身の上、瑣事にも氣がねばかりして居る。せねばならぬ。一寸物を書かうとする。自分の使ひ料の硯はあらう筈が無い。主人のか何かを借りねばならぬ。硯のある所まで行つても、

そこに主人が居る。又居ないにしても主人の席に坐り込んで正しく硯をつかふことは無遠慮である。硯を自分の方へ向けることも遠慮して、むかうから、逆樣につかふのである。今もよく見る情景である。うまい所を見附けたものである。をかしいと云へばをかしい、氣の毒と思へば氣の毒。かう云ふ句が名句である。川柳と云ふもの決して冗談では無いのである。

迷ひ子のおのが太皷で尋ねられ

これは穿つたやうで、實は製りつけた所がある。前の句はまのあたり見た事を寫し、この句は、机の上で想像して作つたと云ふ所がある。

「脈所」手首の脈の打つ所。ミヤクドコ又はミヤクドコと云ふ。

「たて板」能辯を、たて板に水を流すやうと形容するより、能辯者を單に、たて板とも云ふ。

昔は迷子が出來ると、親や近所の人たちが太皷を叩いて、その子の名を呼んで歩いて、尋ねたものである。夜迷子を尋ねる聲としよぼ〳〵雨とは淋しい極致のやうに云はれて居た。

脈所を見せてたて板申すやう

「そら御覽なさい。この筋の膨んで見える所、これを切つたら大變。なか〳〵血の止まるこッちやありません。」などゝ、べラ〳〵哆り立てる、大道の藥賣の樣子。

この「脈所」を、脈所から切つた、即ち手首だけ描いた繪を意味するとし、手相の圖と解して、卜者の哆る所と見た說があるが、たゞ「脈所」で手相の圖とはどうも

受取れぬ。又脈所を自ら傷つけて見せて、口上を云ふ創藥賣との說もあるが、それなら唯「見せて」では云ひ足らぬ筈である。

上下を着て文盲な酒を飲み

大工の棟梁が、棟上の酒を飲むところ。着馴れぬ上下を着てけふは一ぱし學問もありげな姿で、そして何もわからず唯云はれるまゝにして、その式宴に在るところである。たゞ「ハイ〳〵」などゝ云つて畏つて飲んでる樣を「文盲な酒を飲み」と云つたのである。

半兵衛雛の頃から心がけ

「半兵衛」心中宵庚申の半兵衛なり。

半ベエといふを、この句にては字の都合にて半ビョウエとよみたり

半兵衛がお千代と心中するに、死道具を毛氈で包んで持行き、「いざ此方へと毛氈を土に打敷き、なうお千代、この毛氈を毛氈となな思はれそ。二人が一所に法の花、紅の蓮と觀ずれば、一蓮托生頼みあり云々」といひ、「卯月六日の朝露の、草には置かで毛氈の、上に無き名を留めたり。」とある、この毛氈を捕へて、半兵衛が、家の不和を、これでは辻もと思ひ切り、三月の節句の頃から、女夫心中の意を決し、その時は、この雛壇の毛氈を使はう、と心がまへして居たらうとの穿ちである。

川柳の作者は、悲劇中にも可笑味を捕へる。それは宜いとしても、半兵衛の場合のやうな、どうする事も出來ぬ、切迫つまつた心中を、こんな風に云つて弄ぶのは、

「喰ひつみ」新年に三方に熨鮑、勝栗等を飾り物やうに盛りたるを云ふ。これを酒の肴とするなり。また蓬萊とも春盤とも云ふ。

「一分」吉原の臺の物の價。

「坊主禿」禿、七歳までは、もみ上を殘して坊主にしたるもの。

作者の心が低いのである。同じ川柳のうちでも、「吉原へ樒のもとで借りに來る」とか「伴頭の末期に子あることを云ひ」の如きは、作者の高く溫い心が見えて、宜い。

喰ひつみがこしやくに出來て一分めき

喰ひつみが、なまいきに小器用に出來たが、さて斯う見たところ、なんだか吉原の臺の物らしく見える。

臺の物の上等なのは、まん中に松を立てなどして、蓬萊然たるものである。

捨子ぢやと坊主禿を撫でまはし

もと捨子であつた子を、捨ひ上げて養ひ、やつと七つ

になつて、坊主禿にした。幇間や客など、この禿が捨子、と聞いてから、見る毎に、可哀想にこの子は捨てられて居たのか等とよく皆して頭を撫でる、と云ふのである。

「捨子ぢや〳〵」と云ひはやす樣を「捨子ぢやと」と云つたのである。「撫でまはし」と云語に、いかにも無造作にクル〳〵撫でくりまはす樣が寫してある。

藪入をなまもの知りにしてかへし

奉公人が、なにも世間の事を知らずに、只專念に主家で働いて居る。それが藪入をする。その際に、主家の內儀はもと泥水であつたの、番頭の佐七どんは此頃內々で遊ぶの、遊びといふことは斯う〳〵することだの、と、

「流星」たゞ一筋を描き去る花火の名。川開の初め際にはこの種の簡單なるものを揚げ、後には立品玉、瀧見車など云ふ仕掛花火も見するなり。

知らぬでも宜いこと、知らぬ方が宜い事を、いろ〳〵人に教へ込まれて、今度主家へ歸つて來ると、何となく上を見くびつたやうな態度になつて、時々横着をするやうになる。この句にいふのは、先づは未成年の小僧君と云ふところであらう。

流星のうちに座頭は飯にする

兩國川開である。座頭即ち盲の男がお供をして來た。まだ大した花火にならず、平凡な流星ぐらゐが上がるうちに、もう酒をやめて飯を食ふ。目のある者は、花火の興に浮かれて、なか〳〵まだ飯どころでは無いのである。

禿よくあぶない事をいはぬなり

花魁の日々を親しく知りぬいて居る禿は、甲の客に云つて宜いことを、乙の客に云つては悪いと云やうな、さう云わきまへのまだ無い子供であるから、そんな不都合なことを云ひさうなものだが、よく云はぬものだ、と云やうに解した説が多いが、どうも私には納得がいかぬ。私はこの「あぶない事」とは「あぶな繪」の「あぶない」と云ふ意味と同じでは無いかと思ふ。閨の事などばかりよく見聞きして居る禿が、よくその方のことを口走らぬものだ、と云ふのであらうと思ふ。

客分と云はるゝ女立ちのまゝ

「傀儡師」首より人形箱なかけ、その箱の上を舞臺として人形芝居を見せるもの。

嫁を連れて來て、まだ都合あつて披露もせず、たゞ當分客分として置いてある。さう云ふ女は、着がへも無く、着のみ着のまゝで居る、と云ふのである。「立ちのまゝ」を立つたまゝ物いふと解して、威張つてる態度としてゐる說もあるが、どうも然うで無い。「出は出たが二條の后立ちのまゝ」などを見てもわかる。

傀儡師十里ほど來た立ち姿

傀儡師のいでたちは、よく繪にあるやうに、猫頭巾をかむり、上衣の上へ袖無を着、手には手甲、足には脚絆、その邊から出て來たとは思へない。十里ぐらゐ歩いて來たやうな恰好に見える。

鷄の何か言ひたい足づかひ

川柳にある斯う云ふ動物の寫生は、頗る特色があつて面白い。鷄が一つ所に立ちどまつて、チョイ〳〵と片足上げて、その片足は物を攫むやうな形になる。その工合が、何か物を云ひたいやうな樣子に見える、と云ふのである。この句を見ると、誰も無意識にして居た鷄に對しての觀察を思ひ出して、なるほど「何か言ひたい」やうな樣子だつた、と思ひ出す。

手拭にきんたま出來る一さかり

「一さかり」と云ふ語はよく川柳に出て來る。若くて色氣あり、物事のはでにキビ〳〵してる時のことを云ふ。

「新そばに小判を崩す一さかり」の如きもさうである。この句は、手拭に糠を包んで顔をみがく、その手拭の樣を云つたのだと云ふ説があるが、それが宜からう。男である事は勿論である。

杖つきの酔はれた所は盛直し

幕府小普請方の役人を杖つきといふ。建築の際、水盛りは杖つきのはかつたもの。その杖つきが酔つて盛つた所は、あとで仕直す。と云ふ説がある。どうも納得が私はいかぬが、こゝではこの説を記して置く。

婚禮を笑つて延ばす使者を立て

「むく鳥」田舍者のこと。

「格子」吉原青樓の格子。

「訴訟」公の訴訟の意にあらず。主人へ頼むこと。浄瑠璃などにも

下町の火事。

むく鳥が來ては格子をあつがらせ

むく鳥が一群來て、正視して耻ぢずといふ態度で、しげ〳〵と「お女うろ」をながめわたして、わや〳〵と批評し合ふ。すつかり風通りをふさいで了ふ光景。

振袖は云ひぞこなひの蓋になり

娘が、何か云ひそこなつた時、振袖で口をおほふ。

せめて色なれば訴訟もしよけれど

奉公人が盗をしたとか何とか不都合な事をした。色事

例多し。

「芳町」こゝは明和安永の頃男色を賣る所の隨一なりき。

「派が利かず」今いふはゞがきかずなり。

「すさ」藁などを寸許に刻みて壁土に交へて塗り込み、乾いてひゞのいらぬやうにする物

「實ばなし」みのいつたでは無い。そのとりなしを頼まれた人の思はくである。せめて色事でゞもあると、何とか取りなしやうもあるが、と云ふその思はくの「せめて色なれば」と云ふ所に面白みがある。

よし町へ羽織を着ては派が利かず

よし町へ行く客は僧か、奥女中などで、羽織着た男の客などは、とんと幅のきかぬ所さ。

壁のすさむしりながらの實ばなし

男女であらう。納屋の裏での立話し。冗談どころで無い、實のいつた話をして居る。「おれも親が年取つてるから、親のいふことは、すなほに聞きたい。親にたてついてとか、親に納得させないで、お前と一緒になつては、末長く添はれぬやうな事になつては、大變だから、こゝで急いでは可かぬから、だから、」などゝ話しつゝ、手は無意識のやうに、女の倚つかゝつてる壁のすさをむしつたり、それを兩手で細かく切つたり、それから指さきで丸めて投つたりして居る有樣。よく斯うした場合に人の動作を寫した。それではその壁のすさむしる事が主として寫されてるかと云ふに、「壁のすさむしりながらの物案じ」とか「物思ひ」とかいへば、さうなつてる觀があるが、「實ばなし」であるので、どの部が主とも客とも、分析好きの人でも分析が出來ぬ。芭蕉が俳諧に就て云つ

話。浮いた話にあらず。

た「黄金を打延べた」作である。

國の母生れた文を抱き歩き

可愛いゝ娘を他國へ嫁にやつた。姙娠したと云ふ報を、郷里の母が受取つた。それから氏神様に願がけして、無事を祈つて居た。愈生み月になつてからと云ふものは、母は烈しい樂しみと烈しい心配と一緒になつた心持で暮らして居る。ところへ、安産の手紙が着いた。母の安心喜び、言語に絶して居る。その手紙を持つて、あちこちに吹聽に回る。そこを寫した。

「生れた文」と云ふやうな言ひ方は、川柳に普通である。

「抱き歩き」は、その手紙を手に持つて、胸のところで

「鹽引」鹽漬にした魚類をすべて云ふ語なれど、普通鹽引とのみいへば鹽引の鮭のことなりこゝも然り。

かゝへたやうに大切にして、歩きまはる所を、初孫を抱いたやうな姿と見立てたのである。

作者は、笑つてゐる。しかし決して嘲笑をして居らぬ。その國の母とともに嬉しがつてゐる態度である。

鹽引の切殘されて長閑なり

歳暮に貰つた鹽鮭が、臺所にぶら下げてある。それを段々切つて食べた。もう殘りが少うしになつて、頭の下五分程になつた。もうその頃は二月の末、春漸く闌ならむとする時である。

「切殘されて」と云つて、もうあと少しに切殘されて、と云ふ意を利かせてある。語そのものによりてのみ解か

「お玉」伊勢神宮への參拜道なる間山に、お杉お玉とて、二人の若き女杉葉などにて美しく飾りし小屋に居て、三味線を彈き居り。參拜の人錢を女の顔に投げつくるに、樂器を奏し歌ひつゝ巧にそれを避く。この技を興がりしなり。二人より多くも居るやうになり、又胡弓を交へもしたり。明治三十年代、なほ見世物の如き躰にてこのうと思ふと、わからなくなる。「長閑なり」と云つて、臺所の春の景及び情になつてる所、名句である。

江戸者で無けりやお玉が痛がらず

お杉お玉は極めて早口にうたふ、「親方さんて、お杉の顔へ投げて通らんせ、ほつてやらんせ、投げてやらんせ、ほつてやらんせ。親方さんて、投げさんせ、縞さん、紺さんはち巻さんて、投げさんせ。」投げても〳〵當らぬ。顔を右左に早くよけ、或は撥もて受け、どうしてもあたらぬ。客は殘念がつて錢をつかみ出しては投げる。大抵にしておかう。つまらぬことに錢が減ると、そこに氣が付いて、お玉の前を去るが常だが、江戸ッ子だけは、負

お杉お玉殘りしが、今はあとも無し。こゝのお玉はお杉お玉の略なり。

けじ魂に、金錢に執着が無い。どこ〳〵までもと、財布を逆樣にする勢で投げ續ける。そのうちには、お玉にもあたると云ふ所。「とんだ目にあひの山だとから財布」は、あとの興ざめか。

お袋をおどす道具は遠い國

息子が放蕩をする。父親は嚴しく叱つて、或は勘當をするかも知れぬ形勢。息子のこの際取るべき策は、たゞ母の同情に訴へる一事である。息子は一生懸命に、あはれげな聲を作つて、もう斯うなれば、遠い〳〵國へ參るより仕方がありません。お母ァさんもどうぞお體を大切になすつて。などゝ、この世での遠い國か、ひよつとし

「菅笠」菅の葉にて編みたる笠。旅行の時などかむる。

たら、十萬億土かも知れぬやうなことを云ふ。女親は氣の小さいもの、斯う云はれて見ると、氣がゝりでたまらぬ。何とでもして父親の意を翻へさせなくては置かぬと云ふ氣になる。

菅笠で犬にも旅の暇乞

いよ〳〵菅笠もかむつて、うちの敷居をまたがうとする時、ブチが妙な顏して身を寄せる。「おう、ブチ、行つて來るぞ」と頭を撫でゝ、出かけるところ。

「菅笠で」と云つて、すべてに對する暇乞なども濟まして、もう歩き出す、と云ふ時なる事を現はして居る。

「榊かき」祭禮の時、山車や神輿などより遙に眞ッ先に榊を仕丁が數人にて舁き行く。この仕丁を云ふ。

飯焚に婆を置いて鼻あかせ

上方に「そゝ貧乏」と云ふ厭な言がある。これは美醜など頓と問はず、何でも變つた女を〳〵と片つ端から手をつける人があるもの。さう云ふ人を現はす語である。この句に現はれてる主人もその種の人で、奉公人にいつも手をかける。そこで女房、今度は皺くちやの、去年還暦の赤飯を食つたと云ふのを、飯焚において、主人に鼻をあかせた。

うしろから追はれるやうな榊かき

榊かきのうしろから、ワッショイ〳〵の神輿などが非常な勢で來る。それで先頭の榊かきは追つ立てられ氣

味で行く。と云ふのが、今までのところの定說である。

併し私にはどうも然う思はれぬ。今東京には堂々たる祭列を見る祭禮と云ふものは全く無い。私は今でも盛大な祭禮をする名古屋で育つた。いろ〳〵の名古屋祭りのうち、東照宮の祭禮が最も堂々として居る。その日榊かきが社を出るのは午前八時頃である。それから一時間の餘もたつて、山車の先頭が動き出す。山車の殿の動き出すのは正午近い。午後二時頃になつて、獅子や唐人や武者や神輿等の行列が渡る。祭列は實に終日にわたるのである。朝まだ人出もそれ程で無い頃に、先づ渡る榊は、今日一日の祭の開始を嚴肅に報ずるのである。榊は非常に大きな榊で、勿論根附きで白木綿を夥しく垂らしてあ

る。舁手が歩く振動につれて、大榊がガサ〳〵ガサ〳〵と大きな響をする。榊がきはゆる〳〵と練つては行かぬが、さりとて急ぎ足では無い。併しガサ〳〵ガサ〳〵と云ふ音と、榊の搖れは、仕丁の足を自然と急ぎ勝ちにする。私はかねてこの句を見る毎に、いつも子供の折毎年見たこの榊かきを思出して、いかにも追立てられて歩く（榊に追はれると云ふで無く）と云ふ樣子があるものだ。よく榊かきの印象を促へたものだ。といつも面白がつた。この印象的に云つたものと解くのが正しいと私は思ふ。江戸の山王祭や神田祭でも、やはり名古屋祭のやうに、榊かきと他の行列とは大變な距離があつたに違ないと思ふ。榊の直き後ろから、神輿などが續くと云ふのは余程

「樽」寶引の樽なり。寶引は今の福引なり。やはり正月に行ふ闘引にて、あたり闘には樽を結び附けたり。

「護國寺」音羽の護國寺なり。小石川區大塚

ちッぽけな祭で無くてはならぬ。

正直にすりや樽は乳母へ行き

正月の寶引、さァ坊ッちやま御引き、乳母も引きます

と、引くと、乳母の引いた闘に樽が附いてる。乳母素早く闘紐を坊ちやんの手のと取りかへて、それ〳〵それそれ、おやまあ坊ッちやまが大當り。と巧に機轉を利かせて坊ちやまを喜ばせた所。

これを辻寶引の句として解する說があるけれども、私はどうもこの句の柄が、良家の室内の寶引らしいと思ふ。

護國寺を素通りにする風車

坂下町に現存。新義眞言宗の名刹。神齡山悉地院と號す。創建願主德川氏にて、將軍家より特遇を受けし寺なり「風車」東京府北豐島郡高田村大字雜司ヶ谷に日蓮宗の寺法明寺あり。そこに鬼子母神堂あり。昔より日蓮信徒の信仰厚し。毎年十月八日より十三日まで法會を營む。こゝの土產に玩具風車あり。この句の風車は、鬼子母神詣りの者を指す。

「雪見」こゝにては、たゞの雪見にあらず、吉原の習はしにて初雪

雜司ヶ谷は護國寺の西に連つて居る。鬼子母神へ詣るには、護國寺を拔けると近い。威勢のいゝ日蓮宗徒がズン〳〵護國寺の境内を、素通りにして往來する樣。

他宗の寺だから、拜みもせずに素通りにする、と云ふ人があるが、それはそれに違無いけれども、他宗だからと云ふ點を強く感じては、この句の味が外れる。

雪見とはあまり利口の沙汰で無し

廓の花や月の爲ならば、まだ宜いけれど、寒い雪の日

には、馴染客たる者、女の名譽の爲に一趣向ある雪見の宴を張りたる、その雪見を指す。

「千住」東京府南足立郡の町にて、東京東北の咽喉にあたる。德川時代には千住宿と稱せり。

に遙々と吉原くんだりまで出かけて、高價な雪見をするのは、あんまり悧巧に見えぬことだ。

寒念佛千住の文をことづかる

千住あたりには、貧寺が散在して居て、そこから寒念佛がよく出た。千住の宿場女郎屋で女が江戸の客へあてゝの手紙を、某まで屆けて下さいなどゝ寒念佛に賴む。回向受ける家で賴まれる。明和頃の冬の千住、聞くからに寒く暗い。そこから出て來た寒念佛が、女の手紙をことづかつて來る、と云ふ。まことに詩である。風俗詩である。

松原の茶屋はいぶるが景になり

スケツチ風の句。輕妙なものである。草双紙の見返しにでもありさうな景。

牡丹餅を氣の毒さうに替へて食ひ

客に牡丹餅を御馳走する。その客はもとより下戸である。上戸が酒をよばれるのは、景氣がよくて、禮儀の遠慮をするにしても、氣の利いた遠慮の仕方をするが、牡丹餅を、もう一つお上りと勸められ、客は不景氣に遠慮をしつゝ、一皿お代りを貰つて、「どうもこれは」などゝ、いやに恐縮して食ふところ。

「親分」惣の者の親分
「惣金具」銅にてしつらへたるなり。

落ちて行く二人が二人帶が無し

男女の駈落である。帶に帶をつないで、見越の松から塀を乘越えて逃げ出したので、男女とも帶なしと云ふ所。但しこの句は理窟で、想像であるから、不自然である。帶をつないで逃げるなら、代りの帶を用意して締めて居たに違ない。それで無いとしたら、余程迂濶な男女である。

親分と見えてへつつい惣金具

表からも見えるへつつい。見ると惣金具で、それが赫奕と光つてゐる。ふう、こゝは親分の家だなと直ぐわかる。

「日傘」今はヒガサとのみ云へど、もとはヒカラカサとも云へり。

語調が如何にも引締まつて、内容その儘に凛としてゐる。氣持のいゝ句である。

日傘さして夫の内へ行き

十歳ほどの女の子である。日傘さして乳母に連れられ、云ひなづけの家へ行く所。無邪氣な樣である。「日傘さして」で幼女をきかせた。

縫紋を乳を飲み〳〵むしるなり

子供の寫生。どこかへ行つた出先きで、皆晴着着てゐる。母の晴着の珍しさに、又縫紋は、染抜きと違つて、手にさはるので、乳を飲みながら、手まさぐりに、紋を

いぢくつてゐる。

ミレーの畫集を見ると、子供の寫生がいろ〳〵ある。よく觀察して、うまい所が描いてある。乳を飲んで、舌を下顎の裏へ丸め込むことを、よく乳のみ子はするものである。そこを描いたの等、いかにも面白い。この句はそれ等と同じ趣がある。「縫紋」がいかにも利いてゐる。

藪入にうすく一きれ振まはれ

この句を生身魂と解する説があるが、私は「出來さうになると藪入歸るなり」の、ほんの一寸出來たのと思ふ。

根ぞろへの横にねぢれて口をきゝ

「根ぞろへ」髮結ふ時前髮、鬢、髻、出來て髮餘り居り。それを髷に結ぶなり。この髷にかゝる時よくその餘り髮のもと、即ち髷の根になるところを揃へるそれを根ぞろへと云ふ

女が髮を結つて貰つてゐる。そこへ、何か用を云ひに來た。今肝心の根揃への所である。それを用云ひに來た人の方に少しねぢ向いて、物を云ふ樣。よく云ひおほせ、よく寫しおほせてある。

庵の戸へ尋ねましたと書いて置き

風流人の境涯である。甲風流人が、乙風流人の草庵をおとづれると、不在で、庵の戸が締まつて、空庵の札かなんか下がつてゐる。甲は無造作に、その戸へ「尊庭辛夷の花ゆかしく御尋ね申候　古志庵宇鳴」とでも書いて去つた所。

隅ッこへ來ては禿の腹を立て

散々つぱら吐られて、それを誰に訴へると云ふ人も無いので、物かげの隅ッこの所へ來て、「なんだあのお勝婆ア、糞婆ア、そつ歯婆ア」などゝ小さい聲でブッ〳〵云つて怒つてる。面白い句である。

小座頭の三味線ぐるみ邪魔がられ

吉原あたりであらう。何か忙がしい時に、子供の座頭が、妙な所に縮こまつてゐる。エ、こんな所に、邪魔だなア。この三味線ち、折れちまうぞ。

舌打ちで振舞水の禮は濟み

「振舞水」夏期、往來の人の爲に、家の前に水を汲みおき勝手に飲めるやうにして置くを云ふ。

飲んだあとで、うまかつたと舌打ちをする。それで謝意は十分。誰に御禮の言を述べずとも宜い。

義貞の勢は蜊を踏みつぶし

新田義貞が鎌倉なる北條高時を攻めむと、大軍を率ゐて極樂寺坂まで來た。それは元弘三年五月廿一日の夜のことで、丁度月があつた。義貞敵陣を見渡すと、北は切通まで、山へかけて木戸を構へ陣を張り、南は稻村ケ崎の浪打際まで逆茂木を繁く引きかけ、そこから續いて、海上四五町が程、大船を並べ、まことに足を踏入れる透も無い。義貞がこゝへ來たのは、官軍大敗の直き後である。彼は一生懸命であつた。今人力の盡し難きを見て、

馬より下り、冑を脱ぎ、海上遙々と龍神に向ひ、太平記の記者の筆によれば、「仰ぎ願はくは内海外海の龍神八部、臣が忠義を鑑みて、潮を萬里の外に退け、道を三軍の陣に開かしめ給へ。」と一心に祈願を籠め、自ら佩いて居た金作の太刀を海中に投入れた。すると其夜の月の入る頃になつて、今まで更に干たことの無い稻村ケ崎の海が俄に二十餘町干上づて沙原となり、敵の兵船は、落行く潮に誘はれて沖に漂つた。神助いやちこなるを喜び勇み、義貞勢はこの干潟を眞一文字に馳通つて、鎌倉に亂入したのである。

斯う云ふ事件があつた。この事件で忠を說くことも出來る。又神を說き奇蹟を說くことも出來る。或は人馬の

「年神」歲德神のことその年の吉方の方角を司る神。

活動を畫くことも出來る。いろ〳〵な方面から見る人々の中で、川柳子は獨り、體をこゞめて、軍勢の足もとを見た。斯う云ふ態度が、川柳子の專門である。

橙は年神樣の痼氣所

注連のまん中の橙のある所は、注連を力士のまはしと見立てると、丁度股の所にあたる。

定宿を名乘つてひどい場をのがれ

東海道々中の畫など見ると、よく宿屋の女が旅人を引張つて、旅人はのがれようとしてゐる所が描いてある。腕力で以て客を引いたのである。隨分小つぴどいことを

した。着物も何も切れさうな所を、「わしは茗荷屋が定宿だから、何と云つても茗荷屋の外へは泊らぬ」と云つたので、あとで茗荷屋から小言が來てはと恐れて、やつと遁して呉れた。

井戸がへに大屋と見えて高足駄

井戸がへの大騒ぎ、その人の群の中に、水のよごれを見込んでチャンと高足駄を穿いて來て、指圖監督をしてゐる男がある。あゝ、あれが大屋だな。

高足駄をはいた用意。又その爲に背いが高く見えて威嚴を備へて居る。それが群がりの中に目立つてゐる。長屋などの井戸がへの一群がりを寫して、巧妙を極めてゐ

る。決して大屋一人を寫したので無く、群がり全體を寫して居る。人口に膾炙してる句で、しかも名句である。

立臼に天狗の家を切倒し

大きな樹を切つて、立臼を作つたと云ふのである。「天狗の家」と云つたゞけの手柄。

禪寺は彼岸の錢にふりむかず

海晏寺正燈寺へは彼岸詣する者か無い。彼岸で賽錢の降る寺はいろ〳〵あるが、兩寺はそれを義まず超然として居る。紅葉の時に降るさと云ふらしく。

「禪寺」こゝにては品川の海晏寺、下谷の正燈寺を指す。兩寺紅葉の名所にて江戸に名高く而して兩寺とも禪宗なる故、川柳にて禪寺とのみ云ひならはせり

「尻知らず」戸障子を明けはなしの儘行くことを云ふ。

たそがれに出て行く男尻知らず

夕方うす暗くなつた頃に出て行く男は、廓か、又は近所の娘と何か約束があつてか、とにかく内所に家を抜け出すのであるから、やつと明ける時音を聞かれずに濟んだのを、體が外へ出たら、もう一度戸障子の音を立てるやうな氣は無い。

たそがれに出て行く男は、尻知らずと相場が定まつてゐると云ふ風に、概括的に云つた所に可笑味が出來てゐる。

隣から戸をたゝかれる新世帶

新世帶を持つた當時はよくこんな事があるもの。仕事

「木馬」今は木馬の名體操用のものにのみ殘れど、これは獸、尾、目、口などそなへたる可なり大いなる木製の馬にて、男兒これに跨りて遊べり。

の手順がわからないので、第一に戸を明けなくてはならぬと云ふ事にも氣が付かぬ。また、生活が眞劍になつて來ぬので、我儘に朝寢もするのである。必ずしも閨の爲とのみ定めないが宜い。句の振りにも、それのみが現はれて居ない。

賣物と書いて木馬の面へ張り

古道具屋の店さきでは無く、並の家の前に、木馬の不用になつたのが賣物に出てる。今よく見る、荷車の賣物、石燈籠の賣物のやうな風である。その賣物の札が、馬の鼻さきにベタリと貼付けてある。そこに自然偶發の可笑味がある。

これがどこが面白い、と云ふ人のありさうな句で、そして妙句である。

昔から湯殿は知慧の出ぬ所
　遠く義朝でも、近く長兵衛でも、湯殿で攻撃されては、妙策の出よう筈が無く、易々とやられて了つた。

神代にもだます工面は酒がいり
　八岐の大蛇以來のことさ。あの男に一杯飲ます入費を惜しんぢや、萬事駄目だぜ。

盃にほこりのたまる不得心

「跡月」先月。先月分

「神代」の句と連續してるやうでをかしい。「どうでせう。御考は、」などゝ、度々答を催促してみても、彼は黙つて居る。「どうも何しろ、この不景氣ですからなァ」などゝ賴りないことを、思出したやうに云つては、又黙つてる、酒など飲みやしない。前の盃に埃がたまつてゐる。饗應してその席で賴み事をした主人は、大いに絶望して、これも言少なになる。白けた座の寫生。

女を口説く所と見る說があるが、句の振りが決してさうした方面で無い。不得心の人は、でつぷりとした、年輩な男である。

跡月をやらねば路次もたゝかれず

の家賃。

路次の入口の所が大屋の家。路次の中が長屋になつてる。その長屋の一軒に住んでる男が、どこかで遊んだか、夜遅く歸つて來た。と、路次口にもう戸が締めてある。叩けば大屋の者が起きて來て、明けて呉れるのであるが、何分にも先月の家賃がまだ拂つてないから、そんな事は出來ぬと、路次口の外に立ちすくんで當惑して居る所。

指の無い尼を笑へば笑ふのみ

この尼は昔遊女であつた。男への心中立てに指を切つたことがある。その後法緣あつて尼になつた。人が、その指の一本切れてるのを發見して、さては昔はとをかしく、さればとて尼になつてる人をピシ〳〵ひやかしも出

「ねのこ」十月の上の亥の日を、亥の子として將軍家より臣に紅白の餅を下され、町家にては牡丹餅を製してこの

來ぬから、少し冷かし氣味に笑ふと、尼は、まさか冷かしがへしも出來ず、又昔話も出來ず、たゞ默つて笑つてるのみ。その時代にありさうな情景。

鉢卷も頭痛の時はあはれなり

祭、火事、喧嘩など、鉢卷して押出す飛出すは、威勢のいゝものだが、頭痛の爲に鉢卷してるのは、頓とはやあはれなもの。

牡丹餅の精進落はねのこなり

春秋の彼岸など、牡丹餅つくる日は、いつも佛事に關係があるが、亥の子に至つて、始めて佛事ならぬ日に牡

日を祝へり。

「急度」字は昔の當て字。キリツとし、シヤンとすること。

「八朔」八月一日の祝日なり。八朔の祝は昔稻の初穗を朝廷に獻じたるより起り、德川時代になりて、家康の江戸入城の日が天正十八年八月朔日なりしより

丹餅が出來る。それで、牡丹餅を擬人して、斯う云つたもの。「牡丹餅も精進落を亥の子にし」と云つた句もある。

穴倉で物いふやうな綿帽子
解に及ばず。くだらなく平凡な句ではある。

急度して出る八朔は寒く見え

八朔には吉原の遊女が白無垢の小袖を着て仲の町へ出た。それは艶な八朔姿であるが、町の貴賤が白帷子で禮裝して互に祝儀に行く姿は、たゞ白くて、色氣絶無で、寒さうに見える。諸大名も白衣で登城慶賀したものである。吉原の八朔を本にして、他を觀て評した句である。

愈この日の祝盛になれり。

「三神」和歌三神、住吉、玉津島、人丸。

「手妻」ほうり投げ等曲藝めきたることをする事。

三神はなぶるとよみし御姿

下劣な句である。女神がまん中、男神が兩方に在すので、嬲と云ふ字の形だとのこと。「よみし」と云ふ語も拙くあり又不當である。

頂いて受けべき菓子を手妻にし

幇間が、貰つた菓子をほうり投げて口でくはへたり等する樣子を云つたものでは無からうか。

緋の衣着れば浮世が惜しくなり
世を捨てゝ僧になる。ところが段々出世して、緋の衣

「太神樂」町をまはり獅子舞品玉などを演ずる一團の藝人。今もあり。

「附木突」附木を製す

でも着る身分になると、心が俗になり、いつまでも長生して、榮耀がしたい氣になる。

太神樂ばかりを入れて門を締め

太神樂が打囃して來た。子供がウンと跟いて來る。門構への家で太神樂をやらせようとする。子供がうるさいから、太神樂だけ這入つたところで、「これ〳〵、這入つちやいかん」と門を締めた所。

「ばかり」で、ぞろ〳〵ついて來る子供等を聞かせた所は妙手である。

附木突腰におどけた拍子あり

ヒヨイ〳〵と、腰をよぢらして、附木を突いてる姿の觀察である。附木突と云ふものが無くなつて了つては、もうこの句の味がわからなくなる。併しこの句の捕へた趣は、今ある何かの勞働者の姿の特殊な拍子を氣をつけさせ、味はゝせる元になつて居る。

馬方が居ぬと子供が藝をさせ

馬をつないで、馬方は一ぜんめし屋に這入つてゐる。子供がそのひまに馬のところへ集つて來て、叱りての無いを幸ひ、いろんな藝をさせてる。

犬ぢやあるまいし、馬がおあづけやチン〳〵はすまいが、この時代には何か馬相當の藝をさせることがあつたべく、檜材をうすく削る。その削る者を云ふ馬喰町一丁目二丁目の横町に附木屋多く、江戸中の附木は大抵こゝより製出せり。

「袴着」男兒五歲の年の十一月十五日始めて袴を着け氏神に詣づる儀を云ふ。

ものであらう。

水かねで胸の曇りをといて置き
鏡は女の魂と云ふ。魂が曇つて居る。すなはちそれを胸の曇りといひなし、水銀でその胸の曇りをといて居ると云ひ興じたのみであらう。

おろし藥をのんで、心配を無くする、と云ふ說があるが、あまり考過ぎて横道に入込んだのであらう。

袴着にや鼻の下までさつぱりし
今まではいつも青涕を垂らし通しで居た太郎が、今日は仕立下ろしの晴着で、紋附に袴、小脇差と云ふなり。

珍しく鼻の下も奇麗にふいて貰つてある。

習ふより棄てる姿に骨を折り
遊女が身請せられて、素人らしくならうとして居る所である。昔里に身を賣つた時、里の振りを一生懸命に習つた。里の振りが身にしみ付いた今日、その振りを棄てて了ふのに、癖と云ふものは恐ろしいもので、昔習込む時よりも骨が折れる。

無い奴のくせにそなへをでつかくし
正月の御供餅である。金の無い奴なのに、見え坊な奴で、お供への大きなのを飾つた。今もよくある趣。

「綿着る」綿帽子を着ること。外出の折女綿帽子を着けたり。

國ばなし盡きれば猫の蚤を取り

江戸に奉公してゐる下女の、姉か何かゞ尋ねて來て、下女部屋で國の話をして居る。爲盡して了ふと、姉がそこに居た猫の蚤を取つてやつてる。しんみりとした、そして野味のある光景。

藪入の綿着る時の手の多さ

奥女中が宿下りする時、朋輩がいろ〳〵手傳うてやる所。

武藏坊とかく支度に手間が取れ

武藏坊辨慶、例の七ツ道具を背負ふので、いつも支度

「初手」川柳の常用語まだ初めのうち、と云ふ意。近頃の柳句に、「油繪の初手は林檎に取りかゝり。」

「ねずの番」吉原の若い者のうち、引ケより寢ずに居り、二階中の行燈の世話をし、又用心の拍子木を打つてまはる男。

に手間が取れがち。

勘當も初手は手代に送られる

放蕩して親に勘當された。手代が仲に這入つて詫をいれて、息子は手代に送つて來て貰つて、うちへ入ることが出來た。こんなのは、まだ勘當のうぶな時代で、また遊ぶ、また勘當、度重なるに從つて、手代に送られて歸つて濟むと云ふやうな簡單な事では濟まなくなる。

五六寸かき立てゝ行く寢ずの番

寢ずの番が這入つて來て、行燈をかき立てゝ行く。俄にパッと明るくなる。そのパッとなつた印象を、五六寸

「馬喰町」今日本橋區内なる町、この町旅籠屋多く、それもジミなる田舍向きの家のみにて、田舍者の旅人はこゝに泊ることになり居れり。

燈心をかき立てる、と云つたのである。五六寸と云へば燈心の長さよりも長い。五六寸は印象的に云つたのである。

新田を手に入れて立つ馬喰町

田舍の地主であらう。望みの新田があつて、それを買取る交渉の必要上江戸へ出て、例の馬喰町に泊つて。段段事が運んで、志通り新田を手に入れて、さて國へ歸るのである。

「新田を手に入れて」と云ふのに、いかにも馬喰町の客の用向をよく現はして居る。

「仕切場」芝居の金錢出納所。座元の手代などこゝに詰めたり。

「持佛」持佛堂の略。

仕切場へ暑い寒いの御挨拶

芝居をいつも觀に來る華主の旦那である。通りすがりに仕切場へ、「暑いな」とか「寒いな」とか聲をかけるを云ふ。「御挨拶」の「御」は、役者側で無いことを現はして居る。

鞠場から立派な形でひだるがり

蹴鞠はこの時代には平氏に普及した。運動で空腹を覺え、鞠場から、食べ物の催促でもする所。鞠履附けた悠揚たるなりの人達が、乞食のやうに飢ゑてるをかしみ。

初物が來ると持佛がちんと鳴り

すなはち佛壇。

甜瓜がはじめて來たと云ふやうな時、先づ初物だから、佛樣に御供へし、チンと鉦を打つて念佛し、それから食べる。

この句は、チンが初物が來た合圖のやうに聞える感じを寫した所が妙。

こはさうに鱈の升を持つ女

うまく寫したもの。鱈を升に入れて買つて來る。鱈がブチ〳〵ごつちやに刎ねまはつてる。それをさも怖はさうに持つてる。「こはさうに」が命である。そして「女」で無くてはならぬ。

唐紙へ母の異見をたてつける

息子とも娘とも取れるが、先づは息子であらう。母がいろ〳〵異見をする。しばらく聞いて居たが、ぢれて、間の唐紙をしめて了つた所。

「唐紙へ」の「へ」は、母が唐紙へ異見する姿になる樣を云つたもの。

捨てる藝はじめる藝に羨まれ

藝者が今は素人になつて、れつきとした内儀になりすまして、もう昔の藝は捨てゝゐる。一方にはこれから藝を賣つて立つて行かうとしてゐる女がある。今セッセと稽古して居る。かの内儀にその女は親しいので逢つて、

「新發意」出家したての小坊主。

その藝事のことを聞く。こんな風と内儀は一寸彈いて、無造作に彈きすてる。それがいかにもうまい。これからの女は、甚しくそれを羨む。一方の今不要にしてゐる物が、一方の今最必要のものである所。

新發意は誰にも帶をして貰ひ
帶がひとり締められないので、居合はす人、誰でも構はずに頼んで、帶をしめて貰ふ、そのあどけなき樣。

内にかと言へば昨日の手を合はせ
昨夜朋輩同志誘ひ合はせて遊びに行つた。そして内では他の事に託して、誰々の内で夜ふかしをして了つて、

宿つたとか何とか云つて、ごまかして置いた。翌日その連中の一人が、堪定のことか或はのろけの交換にか、尋ねて來た。「内にか（在宅かの意）」と聲をかけて這入つて來る。こッちは、こゝでベラ〳〵昨日のことを喋られて、ばれては大變だから、默つて手を合はせて、何も云つて臭れるなの意を通ずる。來た男はニタリとして默頭く。「きのふの手を合はせ」なぞは、柳で無くては云はれぬ、キビ〳〵した語法である。

美しい上にも欲をたしなみて
賣色か妾であらう。いかにも美人である。その上欲のたしなみがある、と皮肉な評をしたのである。茶のたし

なみがある、琴のたしなみがある等いふ「たしなみ」を欲に持つて來た、欲を藝事のやうに云つた所が妙。

四五人の親とは見えぬ舞の袖

藝者であらう。あざやかに袖を振つて舞ふところを見ると、いかにも美しく若々しいが、あれでもう四五人も子が出來た女だ。もとよりその子はこの世に出ずじまひになつてゐるが。この句「神樂巫子」を云ふとの說もある。

天人も裸にされて地もの也

「羽衣」の天人である。能では、普通の着物の上へ羽衣を着けることになつて居るが、川柳子は、西洋の神話畫

「地もの」花柳の女に對して素人の女のことを地ものと云ふ。こゝは普通の人間の女と云ふ意に用ひたり。

のやうに、羽衣を取られて丸裸になつてる、と見て居る。飛行自在の天人も、羽衣を取られて了つては、「今はさながら天人も、はねなき鳥の如くにて、あがらむとすれば衣なし」で、たゞの女になつて居る。

「地もの」と云ふ語を面白く遣つてある。

身の伊達に下女が髪まで結つて遣り

痛快な皮肉である。いつもは下女の髪の世話など少しも爲てやらないくせに、內儀外出の時、下女を供に連れて行くので、下女の見苦しくないやうに、內儀自ら結つてやる所。そこを川柳子評して、明らかに彼女は、下女の爲に結つてやるのでは無く、自分の見えの爲に、結つ

てやつてるのだと。

菅笠の邪魔になるまで遊び過ぎ

旅人が飯盛にはまつて、幾日も逗留し、すつかり旅心が失せて、菅笠を荷厄介に思ふやうになつた。

お初にとばかり姑たてに取り

嫁御が挨拶にまはる所。恥かしさうに「お初に」と云つたきり、一緒に來た姑を楯に取つて、その影に身を隱して居る。

銅杓子かしてのろまにして返し

「七種」正月七日の朝七種の若菜を俎の上に置き、鋏所用具を以てこれを打つ。その後その菜を刻んで粥として朝飯にす。

この句の「かして」を卯木氏が「かりて」の誤と斷じたのは、私も同意である。必ずさうに違ない。活字には誤があるが、木版本には一字の誤も無い、と云ふやうに思ふ人があるが、迷信である。

銅杓子は使ひやうが荒いと、直きに銅と木の柄との繼目がグラ〳〵して工合の悪くなるものである。「のろま」とはその工合の悪くなつたことを指す。

七種を娘は一つ打つて逃げ

七種打ちには唄をうたふ。唄には大同小異でいろ〳〵あるが、私のよく聞いたのは、「唐土の鳥が日本の土地へ渡らぬさきに、薺七くさ合はせてホト、」と云ふのであつ

「紅葉見」おもには、下谷龍泉寺町の正燈寺の紅葉見を指す。又時には海晏寺を指す。こゝは正燈寺なるべし。

た。眞面目な顔してかう云唄をうたひ、拍子を取つて、俎を打つのである。娘がオチョッカイに一寸唄つて一寸一つ打つて、笑つて逃げた所。

赤とんぼ空を流るゝ龍田川

詰らぬ見立で、連歌體川柳とでも云ひたい句だ。赤とんぼを紅葉に見立てたゞけの句。

紅葉見の鬼にならねば歸られず

正燈寺の紅葉見にかこつけて、この寺から吉原が近いので、そちらへ流込む連中が多かつた。さて泊つての朝歸りは、いかにも極まりが悪い、心を鬼にして歸らねば

歸られぬと云ふのである。紅葉見と鬼とはかの謠曲の「紅葉狩」によつて深い緣がある。それを使つて斯う云つたのである。

お内儀の手を見覺える縫箔屋

縫箔屋への注文書、催促狀などは、主人は書かず、内儀が書くもの。それで縫箔屋はおのづから、方々のお内儀の筆跡を見覺える。

泣きがけも尊氏以後はもう食はず

楠公が泣男を使つて尊氏を欺いたは有名な話だが、もうあの以後、あの策の繰反されぬを見ると、あの後にあ

「伊勢島」伊勢より産する木綿縞。伊勢木綿とも松阪縞とも云ふ。小僧等の着物に用ひたり。

の手を食ふものは無かつたのだ。

「泣きがけ」には「先きがけの功名」の「さきがけ」の語呂を聞かせてある。

しばらくの聲無かりせば非業の死

これは何の狂言と限つて云ふで無く、善人が見す〳〵殺されさうになる時、「暫く」と聲かけて救ひが現はれると云ふ、よく古い筋にある樣を云つたのである。

伊勢島のうちは閻魔を尊とがり

正月七月の賽日に、奉公人が暇を貰つて、閻魔堂へ參るは、今も昔も同じである。その閻魔樣を心から尊とが

「にぎ〳〵」手を握つたり開いたりする赤子の藝。

るのは、伊勢島着る時代、卽ち小僧の時代のことで、大きくなると、もう賽日に、不屆きな遊びをするやうになる。

役人の子はにぎ〳〵をよく覺え

これは當時の役人が收賄するものが多かつたので、親が摑ませられるのを見覺えて、子がにぎ〳〵を覺えると、小つぴどく役人を罵つたのである。

この句は初板に出したが、重板の時に、上から叱られたか、こちらで遠慮したのか、この次の句に替へてある。猥りな句もいろ〳〵替へられたが、斯う云ふ種の句も替へられた。併しともかく當時役人の收賄が隨分ひどかつ

たことが窺はれる。

めつかちは大事盲はむごくする

武田信玄は山本勘介を重く用ひて常に謀主の位置においた。勘介は野に在る時、山へ薪を取りに行つて猪に襲はれ、それに空手で向つて、右の目に傷を受け、それよりめつかちとなつた。又武田信玄は、領分内に盲は置かぬと云ふ觸を出して皆放逐した。この事は實はその盲人共を諸國に放つて間諜に使つたのだと云ふことである。併し一般には盲人虐待者として信玄を見てゐた。

女房があるで魔をさす肥立ぎは

「角田川」こゝにては梅若の事件。

「帶解」帶直しとも、紐落しとも云ふ。七歳になりたる女兒十一月十五日に、今までの紐付の衣を脱ぎ、紐なき衣を着、帶を締むる式をし祝ふを云ふ。

病氣の直りぎは、もう大丈夫と思つて、まだ止めて居ねばならぬ事を、つい犯すのは、女房のある人である。

白魚の子に迷ふ頃角田川

白魚は花の頃に子を生むもの。あの魚も子を始めて持つて迷ふ時節に、あの梅若の母も子故に狂うて、角田川へ來た。

帶解は濃いおしろいの塗りはじめ

女はいろ〳〵の場合に厚化粧をするものだが、その第一にするのは、七歳の帶解の時である。

「灯籠」吉原角町中卍屋抱への玉菊、享保十一年三月二十九日二十五歳にて死す。この妓金離れ清くよく人をあはれみ甚だ人に慕はれ居たれば、その菩提の爲七月の盆に中の町に燈籠をともしたるが、追々に見事なる灯籠になり、作り物などして、吉原の行事となれり。

「逆王」將棊の語。今云ふ入王のこと。敵の陣中へこちらの王が入込むこと。入王になればはなかなか勝負のつきにくきものなり。

灯籠に甚だ暗い言訣し

吉原の灯籠を見に行つて、一遊びして來た息子が、叱られて、「エ何その灯籠は見には行きはしましたが、その歸りにあの喜舟の所へその寄りましてね、それからその、俳諧の席が始まりましたのでその、」と、要領を得ぬ云ひ訣をした所。「暗い」を「灯籠」の縁語で使つたのは低級。

逆王を貰ひに出たる料理人

飲食店で將棊を始めた。いつまでも〳〵やつてる。さア逆王となつて、勝負がむつかしくなつた。料理人罷出で、もう火を落しますから、と云ふ。つまり料理人が、この勝負を貰つて了つた形で、そのまゝ止めにする所。

「奥家老」奥向きを取締る家老。

「蜜柑籠」捨子のこと。

花守の生れがはりか奥家老

奥家老は多くの女連を監督して居る。その樣恰も花の山に番をして居る花守の翁と云ふ風情がある。と見立てて、奥家老と云ふものは前世に花守であつたのだらうか、と云つたまでの事。

曉の枕に足らぬかるた箱

かるた遊びに夜を徹して、曉方に疲れて其場にうたゝ寢しようと、かるた箱を引寄せて枕にすると、どうも枕には少し小さくて足りない、と云ふ所。

出てうしやう汝元來蜜柑籠

「二ケ國」武藏と下總。もと兩國橋はこの兩國の間にかゝりし故の名なり。

「なり」いける。

捨子を拾うて、小僧にして段々敎へて、店の事をやらせて居るうち、いゝ氣になつて不都合な事をするやうになつたので、放逐する所。その主人の心持を、禪張りに現はしたのである。

二ケ國にたまつた用の渡り初め

兩國橋の渡初めを詠んだ句、兩方の國にそれ〳〵用がたまつて居たのが、これで相通ずると云つたのである。

鼻紙で手をふく內儀酒もなり

藝者などは、手が濡れると、直ぐ懷にはさんだ鼻紙を取つてふくものである。この句の內儀はもとはそれ者

「江島」七代將軍家繼の時代に、家宣の生母月光院に事へ居たる老女。柄屋善六と云用達商人の商略に卷込まれ、月光院の代參とし

と見えて、ともすると鼻紙で手をふく。さう云ふ內儀は酒もいける。

それ者上りの內儀の樣子が活躍して居る。

病上りいたゞく事が癖になり

藥はいたゞいて飲むもの。病氣あゆくの人は、一寸湯茶を飲むにも、つい癖になつて頂くをかしみ。

饅頭になるは作者も知らぬ智慧

これは江島生嶋の事件を云つた句である。生島が、大奧へ納める菓子屋の蒸籠の中へ身を潛めて、江島の部屋へ通つたと云ふ俗說がある。それを眞として云つたので、

て寛永寺及び增上寺に參詣せし折、木挽町の山村座に芝居見物し、其座の俳優生島新五郎と通じ、亂行いろ〳〵あり、事露はれ永遠流に處せられ、正德四年三月廿六日信州高遠に赴きてまた歸らず。

「生島」大阪の俳優生島新五郎。元祿二年始めて江戸に來り、それより山村座附の和事師の立役となる。江島と通じて正德四年二月伊豆三宅島に流され、享保十八年十月五日謫處にて死す、年四十七。この事件の爲山村座は廢せられたり。

生島は役者だから、何にでも扮するが、まさか自ら饅頭に扮するとは、狂言作者の思ひも寄らぬ智慧だ、と云つたのである。

ところが新五郎にこの事實は無かつた。この新五郎の弟の生島大吉が長持に忍んで其家の後室の許へ通つたのを誤傳へたとの事である。當時の饅頭の蒸籠は澤山の注文の時に、入れて運んだもので、芝居のおくり物として蒸籠を座の前へ積みもした。芝居と蒸籠とは斯うした關係があり、又成程中へ人が這入れる位の丈の高い器であつたから、弟の事と混じてこの俗說が出たのであらう。

「取揚婆」產婆。

「水茶屋」飲水、煎じ茶など賣りて人を休ませる所。

取揚婆屏風を出ると取卷かれ

產婆が、產婦の屏風を出ると、男か女か、どんな子かと、內中の者が、產婆を取卷いて、聞く所。今生れて直ぐ產婆が出て來た所だから、赤子を抱かずひとり出て來た所である。

叱つてもあつたら禿炭を食ひ

いゝ禿だが、えらい疵がある。いくら叱つても、虫のせいで、炭を食ふ。

水茶屋へ來ては輪を吹き日を暮らし

のら〳〵して居る息子。ともすれば、水茶屋へ來て、

「棒つき」今の警官にあたる番人。長き棒を兩手にて突き居たり。

そこの娘を相手に、呑氣な話しながら、煙草を輪にふいて、日を暮らしてゐる。

ふんどしに棒つきのいる佐渡の山

佐渡金山の坑夫は、山を出る毎に身體檢査を受ける。その時ふんどしをするにも、人の見ぬ所で締めるで無く、棒つきの見張がいる。

主の縁一世滅らして相續し

主人に男の子が無いので、番頭が主人の娘の夫になつたと云ふよくある事を云つたのである。主從は三世の縁と云ふ卽ちこの世と次の世とその次の世まで關係が續く

「物狂ひ」狂人のこと謠曲又舞踊などにて物狂ひと云ひならはせり

と云ふのである。そして夫婦は二世の縁である。主家の娘と三世の縁であつたのを一世滅らして二世の縁にしたと云ふ、佛敎の定めを數字的に見た句。

親ゆゑに迷うては出ぬ物狂ひ

謠曲にいろ〳〵物狂ひが出るが、隅田川でも三井寺でも櫻川でも、皆子の行方不明のゆゑに親が迷うて、狂人になつて遠國まで出かけるのばかりである。子が親を尋ねて狂人になつたと云ふのは頓と聞かぬと、親ほどに子が思はぬ冷やかさをひそかに慨してゐる句。

よい事をいへば二度寄付かず

「初會」遊里の語。始めての遊女に逢ふこと

爲になる事を云つてやれば、話が面白くないと思つて、その男は二度ともう來ないやうになつた。

初會には道草を食ふ上草履

二度目や三會目以後と違つて、初會の時は冷やかなもので、バタ〳〵と上草履で來るその途中、外の客の所へ道寄りをして、直ぐには來ていたゞく御都合にはいかぬのである。

喰ひつぶす奴に限つて齒をみがき

昔は、齒みがき粉で齒をみがくと云ふ事は、贅澤な、通人めいた事であつた。何も爲ないでノラ〳〵と家の米

をむだに喰ひつぶしてる奴に限つて、通人風で齒をみがく。

子が出來て川の字なりに寢る夫婦

これは思ひつきであり、誰にも解り易いので、大變に有名な句になり、「川といふ字に寢て見たい」などゝいふ唄もいろ〳〵出來てゐる。夫婦の間へ子を寢せてる姿を川の字に見立てたのである。あまり細かく見て、右の長い棒が夫、左端の棒が妻、子に添乳する爲に體が少しゆがんでゐる等と思つては、考へ過ぎで、作者の意で無い。

取次に出る顏の無い煤拂ひ

煤はきで、みな顔が滑稽に汚れてゐる。そこへ「頼ま
う」の聲がする。さァ困つた、取次に出られぬ。

煮うり屋の柱は馬に喰はれけり

芭蕉の「道のべのむくげは馬に喰はれけり」をもぢつて、斯う云つたのである。煮賣屋で馬士が飯を食つてる。馬は外に繋がれてる。馬は所在無さに、店さきの柱を嚙んでゐると云ふ所。

りやう治場で聞けば此頃おれに化

醫者甲が、診察室で病人から聞く所によると、某といふ坊主が、近頃は、甲だと名乗つて、吉原に遊びに行く

「療治場」醫者の診察室。

さうだ。この噂を聞いた甲の言として作つた句。僧が醫者に化けて遊ぶ事は、前の「脇差をもどせば」の所にも述べて置いた。

足洗ふ湯も水になる旅戻り

旅から歸つて來た。家族や近所の人などが、顔を見るなりいろ〳〵と挨拶したり、話したり聞いたりする。その應答を、歸つた人はまだ足も洗はず、土間に立つたままで爲て居る。その間に洗足の爲に出して呉れた鹽の湯も水になつて了ふ。

旅戻りの喜ばしい忙がしさがよく氣持よく寫されてゐる。

ま丶事の世帶くづしがあまえて來

女の子がま丶事をして遊んで居たが、そのうち飽きて、母の所へ甘え寄る所である。ま丶事は家庭の眞似をして遊ぶものであるから、その家庭を止めて了つた所を、「世帶くづし」と大人視して云つたのが非常に面白い。

この句を、實際大人のま丶事のやうな新世帶と見て、直き遣り切れず、親の許へ縋りに來た、と見る說は、甚だ柳味に遠い頭から出たもので、この句はどうしても子供の寫生で無くてはならぬ。

朝飯を母の後へ食ひに出る

朝歸りの息子、大分膏を絞られたが、やつと一段落つ

いて、朝飯を食ふ時になる。息子は父の視線を避けて、母の後ろ影へまはつて、そつと飯食ひに出て來た所。

すつぽんを料れば母は舞をまひ、

すつぽんを料理するのは、甚殘酷に見えるものである。母はそれを見る毎に、あゝ厭だ〳〵と兩袖をあげ、顏をおほふやうにし、ぢだんだを踏み等するを、「舞をまひ」と云たのであらう

四辻へ來ると追人の氣がふえる

逃げた者がある。追人が一文字に追駈けたが、四辻へ出ると、眞直ぐに行かうか、右へ曲らうか、左へかと、

「白拍子」もと鳥羽院の頃に始まりし遊女の舞の名にて、轉じてさやうの舞などする遊女そのものをも白拍子と云ふ。

こゝに至つて、心がいろ〳〵になる。所謂「多岐亡羊」の所である。この「氣がふえる」と云ふ云ひ方が如何にも面白い。これが「追人は迷ふなり」とか云ふのみの云ひ方であると、平凡極まつて、味の無いものになつて了ふ。この句は「氣がふえる」で活きてゐる。

降參の顔をなぐさむ白拍子

源平盛衰記など、さう云ふ戰記物を見て、その時代の斯う云ふ一光景を想像したのである。一寸異彩のある句である。

武將のそばに、その頃は白拍子がよく召されて居た。戰勝つて、敵が降參した。降參人はあはれな變挺な顔

つきをして居るのを、白拍子が、面白いものと眺めて、「チョイとあの槍の折れを持つたのは、目が飛出て、蟹のやうぢやありませんか。あれぢや後ろの方まで見えるでせうね。」など〳〵、朋輩同志噂しなどして笑ふ所。

成程その時代にあつたらしい想像である。氣の毒な者を、女めらが嘲笑の材料に、見下ろして居る、殘虐な心持。

山のいもうなぎに化る法事をし

遠忌であらう。悲みの無い法事である。寺で精進物を食べてから、直ぐに一同料理屋へ行つて、鰻かなんかで大いに飲むと云ふ陽氣な親族懇親會である。

五つ月を越すと近所へ義理をかき
懐姙である。もう五月以上になると、見苦しいから、
近所へも顔を出さぬやうになる。

返事書く筆のぢくにて王を逃げ
將棊をさして居る。そこへ使が手紙をもつて來た。そ
の返事を書かうと、筆を取つたが、先づその筆の軸で、
王を逃げさせた。
店先の一人の人間の行動が、いかにも活寫されてある。
實際活きて居る。

嬉しい日母はたすきでかしこまり

娘が今日婚禮すると云ふ日であらう。母は襷がけでい
ろ〳〵立働いてゐる。そこへいろんな人が祝ひに來たり
手傳ひに來たりする。襷がけの儘で一寸かしこまつて應
接する。直ぐ立つて働く。又客が來る。と云ふ多忙の有
樣。

醫者の門ほと〳〵打つはたゞの用
急病人が夜なかに醫者の門を叩くのは、はげしい。ほ
と〳〵ほと〳〵と遠慮勝ちに叩くのは、病人で無い、普
通の何か用なのである。

稻妻の崩れやうにも出來不出來

稲妻の崩れると云ふのは、電光の線がゴチャ〳〵と見えることを云ふのであらう。川涼みでもして居て、稲妻を見て居る時の作であらう。見て居ると、いろ〳〵に崩れる。一直線にスッと手際よく崩れるのもあれば、横へ變な工合にひしげたやうに不手際に崩れるのもある。

張物を上手にくゞる高足駄

雨上りの日に、路次か何かを通る人の樣。一杯に、いろ〳〵な所へわたして張物がしてある。そこを高足駄はいた男が、背を縮めたり、首を横にしたりして、くゞつて通る所。

夜が明けて狩場々々へ外科を呼び

曾我兄弟夜討の翌朝の光景。各狩場に怪我人がうなつて居るので、それ〳〵へ外科醫者を呼んだと云ふ想像。頼朝時代に、外科專門の醫者があつたが無かつたか、そんな穿鑿はこゝには要らぬ。

恐悅を水としきみで申上げ

赤穗義士が首尾よく志を果たして、亡君の靈前に、成功を告げ、「恐悅至極に存じ奉ります」と申上げて居る所。

こそぐつて早く受取る遠目鏡

「大黒の……」十二月の子の日に子祭とて大黒天の祭をなす。二股大根を供物にす。

「どうだ品川が手に取るやうだ。茶屋の娘が左の手のひらに、おこしを一つ二つ三つ持つて、右の手でつまんで食つてる。早いなァ、もう皆食つて了つた。おこしが無くなつたら、手の筋がよく見えて來た。あれがあァで、これが斯うだから、あの手の筋では、可哀想にあまり出世は出來ぬな。」いつまでも際限無く遠目鏡を覗いてる。早く見たいので、後ろからこそぐつて、入れ代る。

大黒の好きは大根のぶんまはし

二股大根の形を、「ぶんまはし」と意外の見立てをした所のみが命。

「大職冠」大織冠鎌足のこと。淨瑠璃などに、當字に、職の字を書きならはせり。

江の島で一日雇ふ大職冠

江の島で、海士に鰒など取らせた。その取らせる旦那を鎌足に擬したのである。鎌足の女が唐の太宗の后に立つた。太宗から鎌足へいろ〳〵贈り物した中に、面向不背の玉だけが、讃州志度の浦で龍宮へ奪はれた。鎌足、その地の海士をして海に入つてそれを取らせた。海士は玉を取りかへしたが一命を棄てた。と云ふ俗話がある。この話はいろ〳〵の筋になつて、舞や謠や芝居などに仕組まれてゐる。

よしなあと低いは少し出來かゝり

試みに袖を引くか手を握るかすると、「よしなあ」(お止

し）と云ひは云つたが、低い聲で云つた。斯う云ふのは、もう成功しかゝつたのであると。

河豚買つて餘所のながしへ持つて行き

よしあたつて死んでも、食味の爲に命を棄てると云ふ所に、江戸ッ兒の意氣を張つて、食通がりは河豚をよく食つたもの。この句は、河豚を買つたが、内の者が反對するから、さう云ふ事を云はぬ、友達の家へ持つて行つて、そこで自ら料る所。

女房は蚊屋を限りの殺生し

蚊屋の中へ這入つてる蚊を燒くを云ふ。

「物申」物を申すの略語。玄關がまへの家に案内を乞ふ語。

針仕事手の輕くなるほとゝぎす

杜鵑の鳴く頃は、針仕事も單衣物ゆゑ、手が輕くなると云ふ。

物申といはるゝ迄になりおほせ

客が來ると「物申」と云ふ。即ち玄關がまへのリンとした家に住むまでに出世した。やッと斯う云ふ身分にまで漕ぎつけたと云ふ人を描く。

樽拾ひあやふい戀の邪魔をする

あき樽を拾ひ集めて行く小僧、路次、裏口から這入つて來る。そこの物かげに下女と下男などと云ふところの

「玄關」ゲンカンともゲンカとも發音す。こゝの如きはゲンカとよむ。

戀仲が、內所話をして居る。小僧が來たのを見て立ちのく。

御りんきのもう一足で玄關まで

士の家庭である。主人が外に女を圍うてあるか何かで、今宵も主人の外出は、必ずそこと、奧樣一方ならぬ御愍氣。「それはあまりの踏みつけ方」とか何とか、生硬な愍氣の台詞をいひつゝ、主人のあとを追うて、奧から、もう一足で玄關まで出かけられると云ふところで、さすがに、そこに居る俱の者等の手前を憚り、餘儀なく奧へ歸らるゝと云ふ、屋敷らしい樣。

「火をする」双方が相擦れ合ふと火が出る、を云ふにて、即ち非常に仲の惡きを云ふ。

言ひ出して大事の娘寄りつかず

或娘に心をかけて、いろ〳〵親切を見せて居たが、或時いよ〳〵こちらの心を云つて見ると、折角大事にして居た娘が、その後ピタリと來なくなつて了つた。

家老とは火をする顏の美しさ

家老と烈しく仲の惡い人の顏はすてきに美しいと云ふのである。奧向の女に美人があつて、それが殿樣のお氣に入りで、その女の爲に、いろ〳〵と不行跡な事がある。家老は、あの女めこそ御家を傾くる魔物と、何につけ彼につけ、その女を睨みつける形で居る。

「きつかけの有る」拍子のはまること。芝居に、役者の振りとそれにあしらふ鳴物、唄などとの關係に云ふ。何々の唄をきつかけに歩き出す等の類。

「口につき」口癖に云ひ通すこと。

店先へきつかけの有る唄が來る

息子が、今の間に拔け出して、あれの所へと、支度する折から、丁度店先へ、新内の門附「夕暮毎の浮雲に、心をのせし四手駕、ほんに揃うた肩と肩」など〻唄つて來る。息子が、自らの行動心持に折柄の唄に、ちよいと芝居がゝりの氣味になる所。面白い句である。

藪入はたつた三日が口につき

藪入で家に歸つてる間、何につけ彼につけ、そんな事が出來るものか、たつた三日だもの、と、貰つた暇の三日しか無い事を口癖のやうに云ふ。

「かみさま」寶暦頃(即ちこの句の時代)まで、御家人二三十俵高の妻女をかみさまと皆人稱せり。商人にても富家にてはなほかみさまと稱せり。

かみさまと取揚婆が言ひはじめ

嫁入して、子を產むまで、まだ誰も「かみさま」とは呼び得ずに居た。もさ〳〵した取揚婆が、始めて「かみさま」と呼んだ。これがこの嫁さんの「かみさま」と云ふ稱の始まり。と由來記じみた見方をした所に妙味がある。

奥樣の加勢立臼鍋の蓋

主人があだし女を寵してゐる。奥樣はこれを嫉まれる。その奥樣の方へ味方する者共は、尻の立臼のやうな女中、鍋蓋見たいな顔をした女中である。

ふがひない魂二つ番がつき

心中した屍體が並んでゐる。まだ引取人が無いので、その間番人がついてゐる所。

月更けて下戸のあはれはひだるがり

月見の宴である。上戸は酒のんで、よい元氣を續けてゐるが、おひ〳〵深更に及ぶと、下戸は腹がへつたと云ひ出すその樣を嘲笑的に氣の毒がつた句。

笑ふにも座頭の妻は向きを見て

女は笑ふ時、下を向くか横を向くか、そして口を袖でおほふかして、笑ひ崩した顏を人にあからさまに見せまいとするものである。併し盲人の妻は、夫に對して顏の上のたしなみの必要は無いので、夫と話して、何か可笑しいことがあつて笑ふ時にも、正面を見たまゝで、手ばなしで笑ふ。

「向」正面。

のびをする手に腰元はついと逃げ

アーアと伸びをして、それに托して傍なる女を捕へゐるは、よくある手である。主公か客かは知らぬが、男が伸びをした。その手がそこに侍して居る腰元の邊に怪しくうろつく。腰元油斷なく、ついとそれを避けた所。

圍はれの何を聞くやら陰陽師

「圍はれ」圍はれ者と

妾が陰陽師に何か頻りに聞いて居る。何を聞くのやら。

指切るも實は苦肉のはかりごと

斯うしてあの人の爲に痛い思ひをして指を切るのも、何もあの人への心中立てぢや無い、實はさうして小判を引出さうと云ふので、實に苦肉の計なのだ。

棒の中めんぼくも無く醉は醒め

棒つき即ち今の交番巡査にあたる。その棒つきが棒を左右から突いて居る中に坐して、醉が今醒めた。どんな亂暴をしてこれへ引張られて來たのやらと、その醒め際の面目なさ。

手付にてもう神木とうやまはれ

花魁が身請けされることになつた。まだ本當に身請と云ふ所へは運ばぬが、すでに手付金を抱へ主が受取つた。それでもう誰も手を付けることが出來ぬ女になつて、柵を結ひ、注連をはられた神木の趣になつて了つた。

上下は我儘に着るものでなし

けふは羽織を着よう、けふは袷にしようと、それは我儘勝手であるが、上下ばかりは、着ねばならぬ時あり、着てはならぬ時あり。

勘當を許すと菜を食ひたがり

「すめかれる」濟ますことが出來かれる。解決がつきかれる。

勘當されて居た間は、ろくな物も食へなかつたので、久しぶりで家に歸ると、飯のさいが、もとは斯うまでうまいとは知らなかつた程うまく、菜をかへて食ふ。

今以て根津の燒物すめかねる

根津は岡場所の一つで、低級な娼家が並んで、この時代での客はおもに大工であつた。

その根津へ遊びに行つたら、酒の肴に、何かの燒物が出て、食ひは食つたが、何だかえたいの知れぬ物であつた。あれから大分日が經つが、今以て何魚だつたかわからぬ。

安料理であるから、えたいの知れぬものが、現はれた

「硯ぶた」口取肴などを盛る廣ぶたの類。

のである。ちと氣味が惡い心持が面白く出てゐる。

なんの手か知れぬ夜更の硯ぶた

もう馴染になつてる客が、吉原へ遊びに行つた。部屋へ這入つてから、夜更になつて何か肴を盛つた硯蓋が來た。女は「それへ置いて」などゝ心得顔で居る。女が自腹を切つて、こゝで馳走して呉れるものと見える。はてなこれは何かの手段だな、今度の月見を賴むとか、夜具を賴むとか、いづれ唯では濟まぬに違ない。併し女はまだ何も云はぬ。と云ふ薄氣味の惡さ。

ぶらつくを棹で招いた渡守

三園邊でぶらついてると、渡船の船頭が、棹をふつて乘れ〳〵とまねいた。それについ乘つて例の吉原入りとなつたのさ。

奥家老顔をしかめるものを踏み

奥家老は女中連の悪まれものである。暗い晩に御庭さきを通ると、グニヤリと、あやしいものを踏附けた。誰かのいたづらであらう。

寢て居ても團扇の動く親心

人口に膾炙してゐる句である。添乳して寢つけた。親も一しよに寢て了つた。親は團扇で子をあふいでやつて

「孔明」三國時代の英雄。諸葛亮なり。劉備の爲に常に軍略をめぐらし且つ戰ひし人。こゝにては軍略家と云ふ意にて云へり。

「入込」交ぜて一緒に

たが、自分が寢て了つても、まだ手は無意識に子をあふいでやつてゐる。

煤掃の孔明は子を抱いて居る

孔明は軍略家と云ふ意でこゝに使つた。煤掃の時、それを此方へやつて、あれを何處へかたつけて等と、自分で手を下さず、指圖だけして居る人、即ち煤掃軍の孔明は、子を抱いて指圖してゐるのである。煤掃の時には子供が邪魔になるので抱いて居る。この孔明は、主人であらうか。

唐人を入込にせぬ地獄の繪

入れること。

「みそけ」味噌氣なり自慢の氣味と云ふこと

地獄の繪を見ると、罪人は日本人ばかりである、地獄と云ふものは、ひろく人類のあつかはれる所であるから、唐人も交つて居てよい筈だが、それは描いてない。と地獄繪のあげ足を取つた句。

日和見のみそけで傘を下げて出る

日和をよく云ひあてる人がある。今日は誰も降るとは思はぬ日であるが、日和見先生、たしかに今日は降ると云つて、いゝ天氣に傘を下げて出かける。其樣子に、おれの日和見はあたるよ、今に見ろと云ふやうな所が、あからさまに見える。

「きのじ屋」吉原の臺の物屋即ち料理の仕出しをする家を云ふ。享保の末仲ノ町に喜右衛門と云ふ者あり。もと小田原の產にて料理巧なりしより、臺の物屋を角町の角に出せり。「喜の字へ肴を取りにやれ」など云ひしより、やがて臺屋の通名となれり

きのじ屋を階子の口で人はらひ

きのじ屋の若い者が偉大なる臺の物を輕業の如くさゝげて、青樓へ這入つて來る、二階へ持つて上る時、上から人が下りて來ると邪魔になるから、階子の上り口で、「下りること待つたり」などゝ云つて、上つて行く所。

白いのに其後あはぬ寒念佛

寒念佛が或夜、白裝束の者に出あつた。それは女の丑の時詣りである。丑の時まゐりは、人にあふと祈りが利かなくなると云ふ。一度寒念佛にあつたので、其後道をかへて改めて祈り始めたが、一度ッ切りで、再びあはぬと云ふ風に解する說がある。

「遣手」遊廓にて、花魁に附屬して、萬事をあつかふ婆。

「論語讀み」儒者のこと。

併し私はどうも、白い寒念佛にその後あはない、と云ふ風に解したいと思ふ。もとは寒念佛と云ふものは白い衣を着たもので、それが近來は、勝手なりになつたと云ふのでは無からうか。

藪入が來て母親は遣手めき

娘が奉公さきから、藪入で歸つて來た。そのそばにくつついて母親が娘の世話をしたり、娘を訪ふ客に應接したりする樣子、吉原の遣手然たる樣子になつてる。

家持の次に並ぶが論語讀み

何か町の集會である。家持ちの旦那が正席に据ゑられる。その次席に儒者が着いてる。當時の席次の樣子が見える句である。

霜月の朔日丸は茶屋で飲み

十一月一日は顏見世である。けふは朝から芝居へ詰掛けたが、チャンとそれでも朔日丸は懷中して來た。斯樣な女でも、さすがに芝居の中では人目があるので、幕あひに茶屋へ來て、飲む所である。

新造の厄介にする鼠の子

傾城が猫を愛養する事が流行つて、それに連れて、新造連が南京鼠の類を愛養する事が流行つた。その鼠が子

「朔日丸」月の初めに一服づゝ飲み置けば、その月中いかなる事を爲すも、經水通ずと云ふ丸藥なり。

「新造」新しく造りたる船を新艘と云ふより出でたる稱にて、禿上り、或は禿ならざるも、

突出し前の見習女郎を云ふ。

を生むと、新造がその始末に苦しんで、いつも荷厄介にする所。係累の無い、又客の達引なども無い、頓とまだ呑氣な新造には、この飼鼠の子と云ふものが大いに係累になると云ふ可笑味。

棧敷から人をきたないものに見る

非常に面白い句である。芝居で、棧敷に居て、大勢の見物を見渡して居る時、さて人間と云ふものは汚ないものだなと感じた所を云つたのである。それア皆いろ〳〵着物を着飾つても居るが、なんだかゴミ〳〵して、汚なく見えるもので、花などの咲いてる、草の茂つてるやうには美しく思へぬものである。川柳を淺い可笑味とか諷

「厄拂」節分の夜、門々に立ちて目出度き事を云ひ立て厄難を拂ひ

刺とかに限るやうに思ふ人は、斯う云ふ句の味を知らないのである。

これを、棧敷に傲然と構へて、町人どもを輕侮して見渡してると云ふやうに解しては、ぶちこはしである。

○藪入のうち母親は盃で食ひ

これも宜いなア。今もこの通りだ。自分の膳は娘にあてがつて、お盆で食事をすると云ふ、この情味。母のこの情味には、何の理窟も無い、實に無垢である。

厄拂出しなに一つやつて見る

私は幼い頃、名古屋で毎年厄拂を聞いた。乞食が一寸

去りて錢を乞ひし者
「出しな」出る際。家
を出る際。

よいなりをして、「ヤック、ハライマショ」「エー、ヤック、ハライマショ」と云つて來る。そして呼ばれた家の門口、又呼ばれずとも、こゝでやらうと思ふ家の前に立つ。錢を包んでやると、その多少によつて、長くも短くも、つまらなくも、面白くもやる。「ヤアラ、目出度やな樂しやな、目出たいことで拂おなら云々」と、いろ〳〵目出度さうなことを、一種の節で云ひ續け、最後に「西の海へサラリ」と云つて去つた。隨分長い文句を幾通りも暗記して居るものであつた。

その厄拂が、家を出る時、一寸口ならしに一つやつて見て、それから、出かける所である。

「霍亂」夏季に起る烈
しき吐瀉病。

丸藥を貰ふ座頭はちゞこまり

斯う云ふ描寫は、川柳子で無くては爲ない所で、川柳で無くては寫せない所で、この言葉で無くて、他の表現では到底駄目である趣致である。

座頭に丸藥を遣る。へへ有難うムりますと、座頭が兩手を重ねて、轉がり落ちるを恐れて、肩をすぼめたその姿勢、寫し盡してゐる。この句の趣が解らなければ、試みに盲人に丸藥をやつて見給へ。目前にこの句の姿が現はれる。

霍亂もどうか祭の罰あたり

夏祭のあとで霍亂になつた男がある。あの男のことだ

「伊豆節」伊豆の鰹節。それを伊豆武士に云ひかけ、即ちこゝにては北條氏に云へり。

から、どうも神罰を蒙つたやうに思はれる。

伊豆節も八代迄はだしがきゝ

北條氏は桓武平氏で、貞盛の二子維將から出、その裔の時方が伊豆介となつて、子孫常に伊豆の北條に居たので氏の名とした。この時方の子の時家の子の時政が、頼朝の外舅と云ふところで、輔佐して權を振ひ、頼家將軍の時に執權となつたのが、北條氏の威勢を張つた第一代で、それを繼いだ第二代義時、第三代泰時、第四代經時第五代時頼、第六代時宗、第七代貞時、第八代師時、まではまだダシがきいたが、第九代の高時で、もう駄目になつて亡びて了つた。

「しきせ」奉公人に主人よりやる着物のこと

「閻魔堂」所々にあれど淺草藏前の長延寺の閻魔堂最も盛なり。正月十六日及び七月十六日に奉公人暇をもらひてこゝに參詣す。

半分はしきせで拜む閻魔堂

閻魔堂の參詣者が一年中どの位あるか知らんが、その參詣者の半分は、正月七月の兩十六日の奉公人であらう。即ち參詣人の半分はお仕着せ着た者等であると云ふのである。

棧敷から出ると男を先へ立て

芝居。品のいゝ女客が、棧敷を出る毎に、茶屋の男を先導にして、茶屋へ行つたり、用をたしに行つたりする樣。

人め物たゞ遣るにさへ上手下手

全くさうである。自分の物でも無い、人の物を、無代でやると云ふ場合でも、そこに巧拙があつて、よい心持に貰はせるのと、厭氣にならせるのとある。

よい娘年貢すまして旅へ立ち

よい娘は器量のよい娘。その容色を愈吉原へ賣物にすることになつて、それで纏まつた金が出來、やつと年貢も濟まし、それから遠く江戸へ赴いたと云ふ悲劇。

藥の苦せない親仁は喧嘩の苦

伜が病身だと、親は藥の苦ばかりするが、伜が達者なら親は苦が無いかと云ふに、さうはいかぬ。達者な伜は

またよく方々で喧嘩をして、親仁はその苦が絶えぬ。

私は前にこの句を親仁自らが、病身で無く藥の苦をしないと、さう云ふ元氣のいゝ親仁はよく喧嘩をして、それに就て苦が絶えぬと云ふ風に、親仁自らの喧嘩と解して居たが、今思ふに、前述の解の方が宜い。

親とのみ云はず、特に親仁と云つたのは、喧嘩に就ての心配は、母親よりも父親の受持であり、その處置に働くのも父親であるからである。

いつとても木遣の聲は如才なし

木遣の唄は、めでた盡しで、枝も榮えりや葉も繁ると云ふ類で、それを景氣のいゝ聲を張上げて唄ふ。それを

聞いた感じで、いつでも、木遣と云ふものは、如才ない世辭を云つて、又如才なく景氣をつけるもんだと云つたのである。

鑓持は胸のあたりをさし通し

槍持は、刀をさすに、普通よりは、刀が體に接するやうに、落しざしと云ふやうな風にさす。それで、刀をさす所を見ると、胸のあたりをさし通すやうに見えるのである。

袂から口ばしを出す拂ひ物

拂ひ物を買ふ者は二人以上來てる所。買手の甲が、賣

「二百」蹴轉と稱する下等なる賣色の代。切二百、泊りは客より酒食をまかなひ、夜四つより二朱と蜘蛛の糸卷に記せり。

けころは天明の末迄、下谷廣小路、同數寄屋町、同提灯店、同佛店、廣德寺前通り、淺草堀田原邊其外所々にあり

手の高い、云ひ値を諾しさうになると、乙が、賣手に見えぬやうに、袂から指を二本とか三本とか出して、「これにしろ〳〵」など〻入知慧をする所を云つたものであらう。

きめ所をきめた二百はしやちこばり

蹴轉を買ふ男が、貪られない用心に、あとで云出しさうな事を、さきに此方で云つて、酒はいらぬと、泊りには決してせぬと、等いろ〳〵防禦線を限なく張つて、二百と云つたらほんとに二百で遊ぶことにする。斯うなると、女の方も何も冗談一つ云ふゆとりも無く、色氣も無く、坐つて、要求を待つてる態度を、「しやちこばり」と

寛政以來は無くなれり。

二百はまた宿場の飯盛の枕代でもあり。

「腰縄」四人の腰に結付けたる縄。

云ふ、うまい一言で形容したのである。この句は蹴轉で無く飯盛と解してもよい。

腰縄の氣で母親は亭をあづけ

娘が此頃あぶなつかしいので、留守の間などは心配でならぬ。それで、自分外出の折など、これだけ亭をうんでお置き、と亭をあづけて行く。さう云ふ仕事を課せられると、娘は何をする時間も無いことになる。腰縄をつけて引張つて居ると同じ効果になるのである。

十分一取りにおろかな舌は無し

コムミッション取りは、いづれも能辯な奴ばかり。

「見附」牛込見附、四谷見附など今も名稱殘れり城垣の切れ目即ち通行口の所を云ふ。そこに番人が居て出入を監したり。

見附からわさびおろしが出て叱り

わさびおろしは、番人の着る菖蒲革の袴の模樣を見立てたのである。

黒札の禮には馬鹿な顔で來る

何か交代でする役がある。人名が札に書いてある。濟んだのは札を裏むけにし、まだ番の來ないのも裏向けにして、當番の人の名札だけ、表がかけてある。一人が當番になつた時、遊びに行きたくなつて、外の人に代りを頼んだ。自分の名札はさうして濟んで裏向にされた。さてあくる日遊び疲れのボンヤリした顔で、交代し

「屋形」屋形船のこと。遊山船にて、屋根をつけてあり。

「猪牙」吉原行きの客を乗せ行く、舳の尖りたる頗る早き船。

この船明暦中に始まる。淺草見附邊船宿玉屋勘五兵衛、同所笹屋利兵衛相談じて吉原行きの走り舟の爲に製す

て貰つた人の所へ禮に來た所。

江の島へ硫黄の匂ふはけついで
　箱根へ湯治に行つた客が、江の島へまはつた所。

屋形から猪牙へ戀路のはぢけもの
　花見か涼みか、隅田川に屋形船を浮べて一連中、藝者交りで遊んで居たが、はぢけ易い男が、そばを猪牙の飛ぶを見て、吉原のあいつを思出し、屋形船から猪牙に乘移つて、里を指す。

岩茸はぞんざいに食ふもので無し

はじめ押送り船長吉と云ふもの藥研形の船を造り生魚を早く送る、其の形を模したれば、長吉の音をつゞめてチョキと云へるなり。押送とは生魚を漕ぐ稱。

「はぢけもの」はぢけるとは破裂する意。逸する意に用ふ。

「岩茸」深山の岩石に生ずる菌。木茸の如き平面狀にて柄無く表面灰色、裏面帶黑色。甚だ得難し。

「紫屋」紅染は京の名産、紫は江戸の名物としたり。紫染をする家の意にて、ひろく紺屋

「へエこれは結構、コリ〳〵〳〵（岩茸を嚙む音）、成程な、……へ、エ木曾から、……どうもこの深山らしい香が、何とも云へませんな。」

紫屋これも同じくうそッつき
　紫は朱を奪ふと云つて、つまりあの色は人の目を欺く惡色として云はれて居るが、紫屋なるものも、「紺屋の明後日」で嘘つきである。

　この「これも同じく」は當時聲色使ひが「これも同じく役者にて云々」と云つた其言草を借りたのである。

春までは踏込んでおく女ぶり

のことを紫屋と云へるなるべし。「朱を奪ふ」論語陽貨篇に、子曰惡二紫之奪一朱也、惡二鄭聲之亂一雅樂一也、惡下利口之覆二邦家一者上

「吉治」京三條の長者吉次信高、毎年奥州に下る金商人、鞍馬より牛若を伴ひ秀衡に面會せしめし男。

藝者か女郎か、女ぶりのよいのは、年の内に元日から七くさあたりまで、今日の所謂お約束が出來てると云ふのでは無からうか。「春までは」の「は」は、その先きまで身を縛つては限りが無い、新春の期間だけは、と云ふ意であらう。

吉治が荷おろせば馬はかいで見る

吉治の荷は奥州下りの時はいろ〳〵の品物、京上りの時は黄金である。どちらにしてもウンと金目のもの。荷を下ろして休むと、馬はよく物をかぐ癖のあるもの。無意識にその荷を嗅ぐ樣子。それを、欲しさうに、目利きしさうに見なした可笑味であらう。

萬歳の口ほど皷はたらかず

萬歳の寫生である。手に持つた皷は振りまはすばかりで、文句は甚だ多いが、その振りまはす皷を打つのは、ほんの文句の切れ目に一つ二つボン〳〵とぞんざいに打つだけ。

小便に起きて夜なべをねめまはし

むつかしやの老主人であらう。もう疾くに寢て、稍更けて小便しに起きて、便所へ行く途に、家の者がまだ起き揃つて夜なべをして居る。老主人が寢たあとだからと云ふので、互にふざけつゝ氣樂に仕事して居た。男女の冗談など隨分主人の床へも聞えた。その主人が起きて來

「いぢりやう」いぢめやう、と云ふに同じ。

たので皆ハッとして、何も知らんと云つた顔で、セッセと仕事して居る。その樣を寢まき姿の主人、グッと睨みまはして歸つて行く所。面白い句。

しうとめと違ひ舅のいぢりやう

面白い句。姑の嫁いぢめは、これア通りものであるが、舅は舅でやはりいぢめる。併し姑とは別の趣のいぢめやうだと、嫁の感じを云つたのである。私のずつと前の句に「洋服の暑さ和服の暑さ哉」と云ふのがあるが、この川柳もこの句と同趣のものである。

あひ惚は顔へ格子のあとが付き

「日合ひ」すき。
「うけ」受答へをする。

「格子」とあるからは、まづは吉原であらう。惚れた同志が格子の内外で、出來る限り顔を近づけて話したあとの、双方の顔の有樣。

辻地藏山師仲間へ抱きこまれ

何の由緒も無い辻地藏がある。それを山師連が、この地藏で一儲けしようと、この地藏樣が物を言はれたとか何とか奇蹟を揑造して、流行地藏にする所である。

目合ひ見てそつといふ程高くうけ

大勢人の居る所である。甲に乙が是非賴みたい事がある。多分金が借りたいのであらう。乙があたりの隙を見

て、人に聞えぬやうにソッと甲に頼む。甲は厭だから、「ア、成程、ウム家賃が溜つたと、それで」などゝ大きな聲で受答へして、乙を退かせる心。乙少なからず困つてる所。

供船へお玉の類はゑり出され

大名の船道中か。お玉は伊勢のお杉お玉であらう。お玉のやうなさうした一藝ある女どもを選り出して御供船へ入れて、殿の御慰みにすると云ふ所か。

恥かしさ知つて女の苦のはじめ

恥かしさを知るのは、情がわかつてからである。情が

わかつて來ると、そこから限無き苦が生まれて來る。一寸アダムイヴが裸を恥づる條を思出させる。

男ぢやと云はれた疵が雪を知り

俠氣稜々たる男が、何か喧嘩の際に、ウンと戰つて、強い所を見せた。皆が「あつぱれ男ぢや、男ぢや」と賞めたゝへた。その時疵を蒙つたが、その疵が、雪の降る前になると、いつも底痛みする。雪を豫知するのである。一寸重い疵あとは、經驗のある人が知つてる通り、雪降り前の如き氣候の變を感じて痛むものである。一時俠名を揚げた疵が、もう其の名も忘れられた頃まで雪前毎にうづいて困つてると云ふ悲しみも出てゐる。

「川止め」大井川など、水増して渡れぬ時、川の平水になる迄兩岸に客が滯在するなり。それを云ふ。

「太夫」萬歳の太夫なるべし。

「夜そば切」夜鷹そばなり。今もある夜更に來る蕎麥の行商。

川止めの間太夫も麥をつき

川止めになつた。皆無聊に苦しんで居る。烏帽子素袍で江戸市中に幅を利かした太夫も、出が出だから、麥つきの手傳ひを一寸やつて見る所。

夜そば切立聞をして三聲呼び

夜更のことだから、蕎麥屋はよく人の秘密な方面に出つくはす。とある家の中で何かうさんな相談をしてゐる。こいつ面白さうな話と、蕎麥屋は暫く默つて戸の前で立聞をして、要領を聞き終つて、あとはこのまだ起きてる人間に蕎麥を賣らうと云ふ商賣氣、「エ、うどん蕎麥切りイ」など立て續けに三聲も呼んでみる。エ、前に橋があ

「名殘の裏」俳諧(連句)の最後の頁のこと。連歌にも云へど、こゝは俳諧なるべし。

つて、こちら岸に竹屋があつて、片われ月凄く、番所の燈、犬の遠吠。

草履取り名殘の裏と聞きかじり

主人がよく俳諧をしに行く。俳諧師の草庵でするのであらうから、供待の草履取りが、俳席の話聲も聞き得る。いつも夜が更けて、草履取が閉口するが、なんでも「名殘の裏」となると、お歸り近くになるので、「そら、やつと、名殘の裏になつたぜ。」と供待仲間と話し合ひ等する。草履取りが、度々、長い間づゝ待たされて、「名殘の裏」と云ふ術語を覺えた所、及び、それを稍得意になつて口にする所に、落着いた可笑味がある。

「七つの星」こゝにては日月及び木火土金水の五星のこと。この各星にあたる各の日にそれ〳〵吉凶あり、この事暦に記しあり、日と月とも星に數へたるなり。

「丸山」文祿年中長崎の今の古町桶屋町邊に遊所を置きしが、寛永十九年に郊外小島郷丸山に移したり。遊客は主として外人なり。

松の内七つの星をよく覺え

新春のうちは、暦に親しむので、七星の稱をもよく覺えて居るが、常は忘れて了ふといふのである。今は却てこの七つの星の名を子供でも平素知つて居る。

丸山でかゝとの無いもまれに産み

川柳で「丸山」と云ふと、大抵外人の遊ぶ樣を寫して居る。だから、ともすると、丸山は外人だけの遊ぶ所と思ふ人もあるが、さう云ふ訣では無い。

この句は、外人の遊びの結果を云つたのである。丸山では、どうかすると、踵の無い子を産む女郎があると云

「盆山」七月十四日より同十七日の朝までに相州大山石尊に詣ること。

「兩介」鳥羽院の畦仙

ふので。女郎の産をすることは今でも稀にある。それは宜いとして、この「かゞとの無いも」が一寸解らぬが、必ず、唐人には踵が無い、と云ふ諺が當時あつたに違ないと思ふ。卽ち唐人の子を産むことがあると云ふのである。

盆山は欠落らしい人ばかり

盆の拂ひの出來ぬ者等は、この盆山をして、債鬼を避けた。「しよせん足りないと大山さして行き」と云ふ句もある。これでこゝの句意もわかる。

兩介は第一めしがうまく食へ

洞に玉藻ノ前と云ふ女寵を受く。この女ること露はれ、安倍泰成に調伏せられて那須野に遁る。三浦介上總介と云ふ兩人に、かの惡狐を退治せよとの勅下り、狐は犬に似たれば犬にて先づ稽古すべしとて百日間犬を射習ひ、やがてかの狐を射殺したりとの傳說ありこの勅を受けし二人を兩介と云ふなり。諺にも「兩介は狩裝束にて」とあり。この犬にて稽古せしが犬追物の起りなりとも傳ふ。

「仲條」秀吉の臣に中

途方途徹も無い妖狐が那須野に隱れたと云つて、支那印度も股にかけたと云ふ奴であり、さも無くて、普通の狐だからとて、ヂッと同じ場所に居るに限つたこともあるまい。どこへ飛んで行くかも知れぬのであるに、通力自在の大敵をひかへて、百日の長い期間、毎日犬を射て練習をしたとは、いかに傳說とは云へ、間が抜けてゐる。この作者はそこをけなす心持で云つてる。まア何はともあれ、兩介は毎日よい運動をして、飯がうまく食へて結構だッさ。

仲條は手ばかり出して水を打ち

條帶刀と云あり。金創及び產科に長ず。この人より中條流產科の一派を成す。元祿前後より中條流と名づくる女醫現はれ、墮胎を生業とせり。これは中條流產科を傳へたる產婆より出でしものなり。享保十八年出版の「名物かのこ」に此中條の畫あり。軒に、「元祖中條流婦人療治、月水はやなかし、けんなくは禮不請」と記したる看板を下げ、入口に長き暖簾を垂れたり。暖簾白地に枡形を染めたり。

仲條は、取扱ふ事が事であるから、又外から見通されては、客も不安であるから、自然、家の中が秘密になり長く垂れた暖簾を成るべくまくり上げぬやうにして居たであらう。それで打水をするにも、家の者が、暖簾の下から手だけ出して打つてる、と云ふ所を寫したのである。

こゝに寫した所は、水を打つと云つても、手桶のを柄杓で打つのに、手ばかり出して打つ、と云ふのでは無く銅盥か何かの水を、手で打つところである。中の知れぬ中條の家の怖しさ不氣味さが、暖簾の下から女の手だけ出て水を打つてる光景で寫し出した所、非常に深刻である。社會の暗みが、目の前に迫つてゐるやうな氣がする。

「配り餅」餅つきの餅を知人に配ること。普通、餅に鹽魚乾魚を添へて贈れり。

「景清」平家に忠勤せし悪七兵衛景清。賴朝を刺さむとして果さず憤懣の餘り自ら兩眼を抉り、漂浪して日向宮崎に亙りて終れりと傳ふ。

「お尋ねもの」上より探索されて居る咎人。

「綿つみ」着物に入れるべく眞綿をひき延ばす。それを引受けて女弟子を使つて遣つてるのが綿の師匠にて、その弟子が綿つみなり。この綿の師匠中には内々に賣色をさする者ありたり。

「生酔」酔つぱらひ。

一軒の口上で濟む配り餅

持たせて遣る使に、口上を敎へるに、一軒分のを敎へてやれば、その同じ口上で何軒持つて行つても宜い。彼岸のお萩配り、五月の粽配りなどの折は、家々によつていろ〳〵口上を違へる必要もあるが、歳暮の忙しい折の配り物なる配餅には、そんな必要は無いのである。

景清はお尋ねものによい男

景清は源氏のお尋ねものになつてたが、盲目だから、直ぐ目につき、機敏に逃げることも出來ぬから、お尋ね者としては大變便利に出來てる男だと云ふのである。

綿つみは蜜柑の筋も肩へかけ

綿つみは、綿のかたまりを下に置くと、延ばした綿に絡む恐があるから、ちよいと肩へのせて置く。それを取つては延ばす。これが手癖になつてる。中休みに蜜柑を食ふ。蜜柑の筋を取つても、下へ置くと綿に交るので、それも肩へのせる、その特殊な行動の可笑味。

生酔はおどかすやうなおくびをし

酔漢が、「エーイ……ウーイ」と、すてきに大きなおくびをするを寫す。「おどかすやうな」と云ふのに、そのおくびの野蠻に大きなことも其儘現はれ、厭がらせの酔

漢の態度も其儘現はれてる。面白い句である。

襟元のうつとしさうな田舍馬

田舍馬の鬣のモヂヤ〳〵してる所を、人間の襟元に髪がもつれたり、うぶ毛が生えたりして、うつとしいのゝやうに觀察したもの。面白い。

ふんどしをするが湯治のいとま乞ひ

湯治に行つてると、度々湯に這入るし、じだらくに暮らして居るから、ふんどしを締めずに、浴衣がけの儘で、ゴロ〳〵して居る。湯治宿を愈立つと云ふ時、同宿の人に別を告げると云ふ時、久しぶりにふんどしを締

める所である。

眞黑な小刀遣ふ野老賣り

野老賣りは山家者らしい男であつたらう。遣ふ小刀の眞黑になつてる所を寫して、その者の樣子を見せた。野老賣りのあつた時代には、成程さうだと面白がらせる句であつたらう。

蠟燭を消すに男の息を借り

百目蠟燭か何かで、女が一吹き二吹き吹いて見たが消えない、それで男に吹消して貰ふ所。どうも艶な氣分である。この二人は親しさうに思はれる。

猿田彦坂際へ來てかぎまはし

祭禮の猿田彦である。道が坂になつたので、よく足もとを注意して見る。さうすると面の鼻が長いので、鼻が下を向いて、あちこちするのが、そこらを嗅ぎまはすやうに見える可笑味。

追出されましたと母へそつと言ひ

いゝ句である。私は斯う云ふのに感ずる。嫁へやつた娘が或日ふと歸つて來た。娘は、この邊へ來たから寄つたとか何とか云つて、人前もあり、云にくいことだから、普通にして居る。やがて外の人が去つて、母獨りになつた折を見て、「追ひ出されました」と唯一言小聲で云つた

そして娘は溢れ出る涙をこらへる。母はこの一言でヒヤリと水をかけられた心地。

夕立の戸はいろ〳〵に立てゝ見る

中が暗くなつては困る。さうして降込んでは困る。それが夕立の突差の間の工夫だ。あちらに押したり、こちらへ戻したり、外して横に置いて見たりいろ〳〵して居る。その人は襦袢一枚だ。篠突く雨。閃々たる電。

金持のくせに小粒にことをかき

大判小判は常にあるが、時々小粒が無くなつて、買物に不自由する所。

「小粒」二朱一朱等の貨幣を云ふ。

「松右衛門」江戸を四分してその各地に非人の頭あり。新橋以南六郷川以北の非人頭は松右衛門なり。この句の頃は松右衛門の方の勢力範圍廣かりし如し。この非人頭は五節句、慶事、葬式の時などの家へも來て、何かの事を執りて禮を受けしなり。追拂ふことは出來ぬ習はしなりきと見ゆ。名は代々同じ名をつぎたり。彼は常に鼻れぢりを持ち居たり。

松右衛門二言といはず酒を受け

例の松右衛門が來た。酒を彼にふるまふ。普通なら少し辭退をするものだが、當然の饗を受けると云ふ調子で、彼は「へえ頂きます」と早速酌をして貰ふその無遠慮を寫した。

抱いた子に叩かせて見る惚れた人

いゝ句だ。女が子を抱いて立つて居る。その女の惚れてる男がその傍へ來た。女は子を道具にして、男に戯れる。「このをぢさんは意地惡をぢさん、いつでも知らん顔の半兵衛をぢさん。ねエ喜代ちやんさうだねえ。憎らしい一つ叩いておやり」などゝ言つて、子の手を持つて、男の頬を叩かせる所。

これぎりの小袖着て寢るたいこ持

幇間は常に貧しくて、着のみ着の儘のもの。これ一枚しか無い小袖を着た儘で寢る。寢まきも無いのである。

網の目をくゞつて歩く嫁の禮

みんなが見て居る、その視線の錯綜してゐる樣を網の目と云つたのである。婚禮の後、嫁が、母に伴なはれて

「灸」二月二日及び八月二日に老幼男女皆衛生の爲に灸をすゑたるもの。

人の視線をかいくゞるやうにして、近所へ禮に回る所。

くじ取りで遣手が灸をすゑてやり
皆が灸をすゑる日の吉原。誰も意地悪の遣手婆アにすゑてやらうと云ふ者が無い。それでくじを引いて、あたつた者が災難と諦めて遣手にすゑてやる所。

剃つた夜は昨夜の枕さたながり
始めて坊主頭に剃つた時のことであらう。さつぱりした。さて夜寢る時に、枕がいかにも汚なく思はれる。昨夜まで、汚ながらずに用ひたのが、頭が奇麗になつたので、急にさう云ふ感じがする。

「鹿島」鹿島の事觸のこと。昔鹿島には卜部氏の禰宜あり、正月四日に卜祭の神事あり、その卜に出たる其年の吉凶を朝廷に奏聞せしが、この事觸は其遺風の墮落せるものなり。打烏帽子に狩衣着たる者幣帛扇などを持ち、鹿島大明神の神勅と稱し、當年中に何々の病流行す、何々の天災あり、それを免れむとする者は御札を授くべし等云ひ、錢を乞ひて、舞のやうなることしたり。もとより鹿島神社に關係なき乞食の類なり。

いそがしくなると鹿島は襟へさし
鹿島の事觸が、妙な振をして舞ふ。段々急調になつて來ると、幣を襟にさして、舞ひまはる有樣。
この事觸の云ふ文句は少も神々しい所は無く、俗惡極まるもので、「これやこなたへ御免なれ、鹿島の神の御託宣でおしやり申す云々」と云つた。

いつちよく咲いた所へ幕を打ち

花見である。山を見渡し、一番よく咲いてる所を選んで、その木陰を占領して幕を打ち、酒宴を初めるのである。これは場所を選定する所。ちつとも私には面白くない句。幕を張ることを、幕串を地に打込むより、打つと云ふ。

病上り母を遣ふが癖になり

前に出たのは「いたゞくことが癖になり」で、律義な方の癖であつたが、これは、寢てゐる間、何でも「おつ母さん〳〵」で、おつ母さんに遣つて貰つて居たのが、癖になつて、起きてからも「おつ母さん、あの茶簞笥に」ある湯呑を取つて頂戴。」

「三分」吉原、太夫の次位の女郎の揚代は時代により差あれど、まづ夜だけ即ち片仕舞は一分又は一分二朱位のところなり。

行燈は百と百との結び玉

吉原河岸見世のわり床の光景であらう。河岸の代は一ト切百文である。こちらの床にも百文で寢てゐる。むかうの床にも百文で寢てゐる。その床と床との間に行燈がともつてる。それを見立てゝ、百文づゝの緡を結んだ結び玉の位置に行燈があると云つたのである。

三人で三分なくなる智恵を出し

三人寄れば文殊の智恵と云ふが、この三人はロクな智恵を出さず、三人寄つて、各人一分づゝ費さうと云ふ女郎買の相談をした。

逃げた時や男の中で夜を明かし

俠客か何かのさし金で、きつとあの男と一緒にして上げます等と云はれ、勸められる儘に、娘は家を逃出して、その俠客の所へその晩は泊めて貰ふ。見知らぬ男が澤山居る中で、ろく〳〵寢もせず一晩明かした。その時の事を回想して云つてる句。

腰元は寢に行く前に茶を運び

武家の家庭の樣子。腰元はもう寢ると云ふ前に、お茶を旦那樣の所へ運んで置く。そのどこでも定まつてる習はしを寫して、腰元の生活を叙したのである。何でも無いやうで、腰元の腰元らしい所が出てゐる句である。

「三圍」江戸向島の三圍稲荷の邊を云ふ。

三圍を溜め小便の揚場にし

遊山船である。小便がこらへ切れなくなる頃、三圍へ船をつけて、こゝから上陸し、皆々先づ小便をする。よくどこの人も言ひ合はしたやうに同じ事をする可笑味を寫したのである。

雪隱の屋根は大かたへの字形り

解に及ばず。つまらぬ句。

子を抱けば男にものが云ひ安し

前の「抱いた子に叩かせて見る惚れた人」の趣に似ても少し内氣な所。この男女ももとより戀仲であるが、女